

こ さ か

小阪遺跡Ⅱ

近畿自動車道松原郡智勝浦線(松原～泉南 平井TB)事業に伴う発掘調査報告書

— 「陶邑」古墳時代集落の調査 —

2001年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



1. 遺跡全景 (東上空から)



2. B区I面全景 (南東から)



3. B区南壁土層



4. 遺物 (埴輪・土器)

序 文

大都会のベッドタウン「堺市近郊」は、大阪府の南西にあって、古来、緑多い丘陵地やのどかな田園地帯が広がっていた所です。それまで自然と共存して良好に残されてきた埋蔵文化財は、1960年代後半からおこった泉北ニュータウン開発と大阪臨海の埋め立て、1980年代後半からの都市基盤整備、さらには関西空港へのアクセス道路・鉄道網の整備等に伴った調査により、皮肉なことに、自然破壊をすることで多くの文化遺産が明らかになり、日々、その姿を現してきたわけです。

このたび、調査を実施致しました小阪遺跡は、大阪府と日本道路公団が施工した近畿自動車道と府道の事前調査で発見された遺跡です。「茅渚縣陶邑」と呼ばれた古代の大窯集地の谷口部に位置します。小規模ながら、早くに須恵器生産を開始した集落として注目された遺跡でもあります。

今回の発掘調査は、道路改良に伴う大変小面積の調査でありました。予想されていた古墳期集落の広がりやの追認、現代耕作地景観のはじまりと言える中世後期の生産の痕跡を確認できました。また、縄紋期～弥生期の氾濫原のあり様を一定程度明かにできた事も、成果として挙げる事ができます。

今後、周辺部もさらに変貌を遂げていくものと考えられ、現代の開発と引き換えに、さらに多くの歴史的事実が明らかにされて行くことが予想されます。地道な資料集積の積み重ねが、当地域の歴史にとどまらず我が国の古代史を解明していく上でかけがえのない資料となるものであり、文化財の保護・保存対策は必要不可欠なものとする次第です。

最後に、本事業を進めるにあたってご支援・ご協力を賜った日本道路公団関西支社・大阪府教育委員会・堺市教育委員会・堺市立埋蔵文化財センター及び地元関係者各位に、深く感謝致しますと共に、今後とも当調査研究センターの事業に一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は大阪府堺市小阪・八田北町地内に計画された近畿自動車道松原那智勝浦線（松原～泉南平井TB）・堺東北線改良工事に伴う小阪（こさか）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公団関西支社大阪工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は、大阪府文化財調査研究センター南部調査事務所が実施することとなり、調査部長井藤徹・調整課長赤木克視・係長藤永正明・係員岡戸哲紀・設計係主査岩本智・事務所長瀬川健・調査第一係長松岡良憲の指示のもと、技師田中一廣が実務を担当した。
4. 調査事業は2000年5月30日に小阪（その1）を開始し、同年9月22日に追事業の小阪（その2）を終え、架設工事は9月22日をもって終了した。整理作業並びに本書の作成は、担当者が2000年9月から断続的に行い、業務を遂行した。
5. 調査の実施にあたっては、日本道路公団関西支社大阪工事事務所、大阪府教育委員会・堺市教育委員会・堺市立埋蔵文化財センター、(株)藤木組・(株)成田組・阪急航空(株)・(株)竹口文化財、地元自治会など関係各位の協力を得た。
6. 調査及び報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課のほか、森村健一・北野俊明・十河稔郁・野田芳正・近藤康司・永井正浩（堺市立埋蔵文化財センター）・森屋直樹・西川寿勝（大阪府教育委員会）・村上富喜子・中村淳磯・島崎久恵（当センター職員）・浅木薫・山尾温子・本多ひろみ・樋口順子（調査補助員）・大長億浩・田中淳一各氏から御指導・御教示・御協力を得ました。記して感謝の意を表します。
7. 調査方法は、1985年制定の『発掘調査規定』Vol.2に従って地区割りを設定し、方位は国土座標第Ⅵ座標系の座標北を基準とし、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。図中の国土座標値の単位はmである。土壌色は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』1995年（15版）に準拠して命名した。本書遺構記号はOB：建物（Building）・OD：堅穴住居（Dwelling）・OS：溝（Stream）、OO：土坑（Orifice）・OP：ピット（Pit）・OR：河川（River）・OW：井戸（Well）・OX：その他・不明（Extra）・OZ：水田である。
8. 本調査における阪急航空(株)前北順二撮影士にかかる空中写真以外の写真は総て担当者が撮影した。本書の遺物写真撮影並びに白黒写真焼付は、南部調査事務所立花正治写真主任技師による。
9. 出土した遺物・作成した図面・写真などの記録については、(財)大阪府文化財調査研究センターで保管している。広く利用されることを希望する。
10. 本書に関わる図面・整図・図版作成、執筆・編集は調査補助員の協力のもと、田中一廣が行った。

目 次

序文	理事長 水野正好
巻頭カラー図版	
例言	
第 I 章 序章	1
第 1 節 調査に至る経緯と既往の調査	1
付. 小阪遺跡関係基本文献	2
第 2 節 調査の方法と経過	3
第 II 章 小阪遺跡を取り巻く環境	6
「陶邑」の古墳時代集落概観	6
第 III 章 調査の結果	12
第 1 節 層序と概要	12
第 2 節 古墳時代の遺構と遺物	15
掘立柱建物・竪穴住居・平地式住居・河川・溝・土坑・落込み	15
第 3 節 その他の時代の遺構と遺物	25
井戸・自然河川	25
第 IV 章 結 語	27
第 1 節 古墳時代集落の構造	27
第 2 節 小阪遺跡の概観	28
抄録・奥付	

挿 図 ・ 表 目 次

Fig. 1 大阪府堺市・小阪遺跡の位置	Fig. 14 溝 2-O S 出土地輪実測図
Fig. 2 調査地位位置図 (1 : 2500 図郭割)	Fig. 15 河川 1-O R・溝 6-O S 出土遺物実測図
Fig. 3 大阪府地域計画図を利用した地区割り	Fig. 16 溝 6・8-O S 土層断面図
Fig. 4 小阪遺跡範囲と周知の隣接遺跡	Fig. 17 土坑 19・11・13・15-O O 土層断面図
Fig. 5 基本土層図 (1-O R ~ 2-O S)	Fig. 18 土坑 15-O O 出土遺物実測図
Fig. 6・7 遺構全図及び全体土層断面図 (折込)	Fig. 19 包含層出土弥生土器実測図
Fig. 8 掘立柱建物 OB-1・2・3	Tab. 1 検出遺構一覧
Fig. 9 掘立柱建物 OB-4・5	Tab. 2 出土遺物一覧
Fig. 10 掘立柱建物 OB-7・8	Tab. 3 作成図面一覧
Fig. 11 竪穴住居平・断面図	Tab. 4 撮影写真一覧
Fig. 12 平地式住居平・断面と出土遺物実測図	Tab. 5 遺構の種類と記号
Fig. 13 溝 2-O S 出土遺物実測図	

図面・図版目次

巻頭カラー

- 1 遺跡全景
- 2 B区I面全景
- 3 B区南壁土層
- 4 遺物（埴輪・土器）

- PLAN. 1 小阪遺跡周辺地形分類及び小字名
PLAN. 2 小阪周辺遺跡と鳥瞰図（茅渚海から「陶邑」を望む）
PLAN. 3 小阪周辺全調査地位置図
PLAN. 4 古墳時代集落遺構全体図
PLAN. 5 小阪古墳時代集落（折込）
PLAN. 6 陶邑古窯址群・古墳・遺跡分布図

- PL. 1 調査地周辺空中写真（2000年7月18日撮影）
PL. 2 遺跡・調査地全景（上空から）
PL. 3 第I面全景・掘立柱建物OB-1・2
PL. 4 平地式住居・掘立柱建物OB-4～6
PL. 5 平地式住居・溝・土坑・落ち込み、遺物出土状態 6・8-OS・7-OX
PL. 6 竪穴住居・土坑・溝、遺物出土状態 16-OD・15-OO・2-OS
PL. 7 竪穴住居、南壁土層 16-OD・2-OS・1-OR
PL. 8 第II面全景 自然流路・5層出土木材
PL. 9 包含層出土遺物(1) 1層・2層
PL.10 包含層出土遺物(2) 2層・3・4層
PL.11 遺構出土遺物(1) 溝・平地式住居・土坑
PL.12 遺構出土遺物(2) 溝2-OS
PL.13 遺構出土遺物(3) 溝2-OS
PL.14 遺構出土遺物(4) 河川・土坑・溝

第I章 序 章

第1節 調査に至る経緯と既往の調査 (Fig.1・4、PLAN.1・2・6)

小阪（こさか）遺跡は、大阪府堺市小阪・平井・八田北町に所在する遺跡である。堺市は、大阪府の南部にあって細長く延びる泉北地域の北部にあたる。その東部は、地形分類上、通称、泉北丘陵と呼称される丘陵や発達し

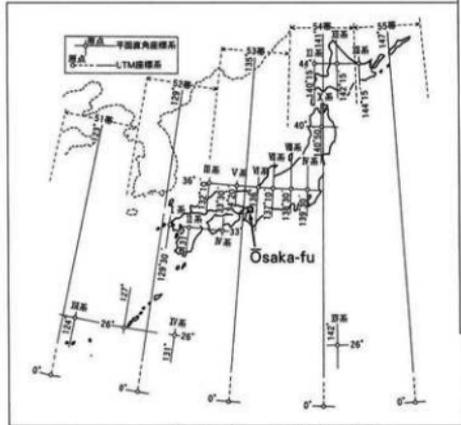
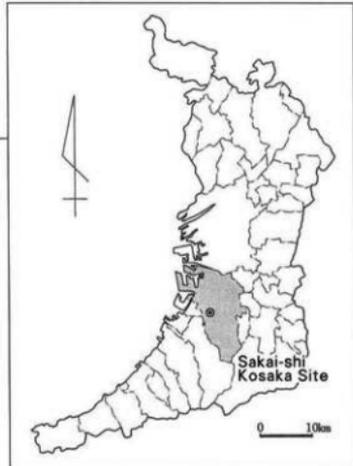


Fig. 1 大阪府堺市・小阪遺跡の位置



た段丘地帯であり、中小の河川が丘陵や段丘を開析して、谷地形を形成している。

小阪遺跡の地は、完新世に形成された低地の自然堤防帯（沖積段丘）に属し、

谷地形の間谷口には、谷底平野や後背湿地が広がり、水田として利用されてきた。石津川・陶器川によって形成された後背湿地部には、発掘調査によっても、何層もの洪水層が確認されている。近年まで条里型地割をよく残した水田地帯であったが、道路建設以後、休耕地・資材置場・産廃処分場・店舗用地・ガソリンスタンド等に改変が著しい。

小阪遺跡の調査は、泉北北線・主要地方道泉大津美原線（旧称府道松原泉大津線）建設に伴って1977（昭和52）年度の大阪府教育委員会の分布調査¹⁾を経、1985（昭和60）年7月、財団法人大阪文化財センターによる試掘調査（27ヶ所の2×2mグリッド調査）が行なわれた。それを受けた全面本調査が、1985（昭和60）年度から90（平成2）年度にかけ、府道単独区・公団単独区・併設区と細分した複雑に入り組んだ方式で（その1～9・その南1～2）調査区を設け、細分調査区には枝番が付与され、実施された。調査結果の詳細については、1989～90（平成1～2）年に整理事業が実施され、大部の調査報告書がすでに刊行されている²⁾。

今回の調査対象遺跡は、上記事業において確認されたわけで、周知の遺跡を明示する大阪府教育委員会編・刊行、最新の「大阪府文化財分布図1996」及び「大阪府文化財地名表1997」によると、「堺市181番（大E-540）」の周知の遺跡としてマークされている。すなわち、北東の原池から南西の泉北2号線までの東西1100m、南北は伏見丘陵半ばの400mの範囲である（地名表範囲0.65×0.8km/集落

跡・その他の遺跡／古墳・中世)。泉北丘陵上位段丘から中・下位段丘を開析してきた陶器川が石津川に合流する地点の谷底平野を中心に広大な範囲を占める。遺跡の中心は、両河川に挟まれた微高地に立地する古墳時代期の集落跡である。弥生期・縄紋期の土層も確認されるが、河川の氾濫に伴った自然の流路や氾濫堆積層であることが判明している。

今回は、近畿自動車道松原那智勝浦線(松原～泉南平井TB)・泉北北線・主要地方道泉大津美原線改良工事に伴い、古墳時代集落遺跡部分の埋蔵文化財発掘調査を日本道路公団関西支社大阪工事事務所の委託を受けた財団法人大阪府文化財調査研究センターが大阪府教育委員会の指導に基づいて実施するに至った。

註① 小阪文献1-①に同じ。道路は、1965(昭和40)年7月都市計画決定され、1971(昭和46)年3月事業認可されている。小阪遺跡については、分布調査により周知され、1981(昭和56)年12月以尋実施をした、丹上・真福寺・太井・日置荘・福田遺跡の一連の調査と共に行なわれたこととなったものである。

註② 小阪文献1-①②(財)大阪文化財センター編1992『小阪遺跡本報告書』。調査区毎には当該年度・調査担当者により、14冊の概要報告書が刊行されている。

註③ 尚、大阪府教育委員会文化財保護課編1997・3『大阪府文化財地名表』に文献を掲げる。堺市教育委員会1983『堺市文化財調査報告12集』記載の小阪270番地調査地点は、「堺市263平井遺跡」に包括される。また、堺市教育委員会1993『小阪遺跡発掘調査概要報告』『堺市文化財調査報告第34冊』地点は、「堺市151伏尾遺跡」に包括される。遺跡の統廃合などの行政的配慮には、学史や研究史をも勘案して慎重に行わなくてはならない。誤解・混同を避ける為に記しておく。

小阪6ヶ年の長期に行なわれた大規模調査により、2に示した論考にみえるような成果と共に3の発表・4・5の展示会・説明会が行なわれている。

付、小阪遺跡関係基本文献(～2000)

1. 報告(発行者年代順)

- ①(財)大阪文化財センター編1975『都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書』『文化財調査報告74』大阪文化財センター調査報告集Ⅱ
- ②(財)大阪文化財センター編1986『小阪遺跡(その1) - 調査の概要 -』
- ③(財)大阪文化財センター編1986『小阪遺跡(その2) - 調査の概要 -』
- ④(財)大阪文化財センター編1987『小阪遺跡(その3) - 調査の概要 -』
- ⑤(財)大阪文化財センター編1987『小阪遺跡(その4) - 調査の概要 -』
- ⑥(財)大阪文化財センター編1988『小阪遺跡(その5) - 調査の概要 -』
- ⑦(財)大阪文化財センター編1988『小阪遺跡(その6、6-2) - 調査の概要 -』
- ⑧(財)大阪文化財センター編1989『小阪遺跡(その6-3) - 調査の概要 -』
- ⑨(財)大阪文化財センター編1988『小阪遺跡(その7、7-2) - 調査の概要 -』
- ⑩(財)大阪文化財センター編1989『小阪遺跡(その7-3) - 調査の概要 -』
- ⑪(財)大阪文化財センター編1989『小阪遺跡(その8、8-2) - 調査の概要 -』
- ⑫(財)大阪文化財センター編1989『小阪遺跡(その9) - 調査の概要 -』
- ⑬(財)大阪文化財センター編1989『小阪遺跡(南その1) - 調査の概要 -』
- ⑭三宮昌弘1989『初期須恵器製作集団と韓式系土器』『韓式系土器研究』Ⅱ 韓式系土器研究会
- ⑮(財)大阪文化財センター編1990『小阪遺跡(南その2) - 調査の概要 -』
- ⑯(財)大阪文化財センター編1991『小阪遺跡(南その2-2) - 調査の概要 -』
- ⑰(財)大阪文化財センター編1992『小阪遺跡 - 近畿自動車道松原海線・府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査本報告書 -』

2. 論考(執筆者五十音順)

- ①一瀬和夫1992『古墳出土の埴輪と初期須恵器』『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター
- ②入江正則1992『小阪遺跡の開発についての一考察』『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター
- ③岡戸哲紀1994『陶器の韓式系土器 - 軟質系土器の資料紹介 -』『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2(財)大阪府埋蔵文

化財協会

- ④岡戸哲記1994「揺籃期の陶邑—集落の動向からみた陶邑の成立過程—」『文化財学論集 奈良大学文学部考古学研究室文化財学論集刊行会
- ⑤尾谷雅彦1992「小阪遺跡出土の高坏型器台について」『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター
- ⑥合田幸美1988「出現期の竈」『考古学論集』網干善教先生華甲記念会
- ⑦合田幸美1992「北白川C式土器について—小阪遺跡出土土器を中心として—」『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター
- ⑧三宮昌弘1988「小阪遺跡の古墳時代集落について—五世紀代東北地域の集落の様相—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- ⑨清水篤1993「小阪遺跡出土鉄鍬の提起する問題」『研究紀要』Vol. 1 大阪文化財センター研究助成報告書
- ⑩鈴木陽一1992「和泉における古式土師器の様相」『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター
- ⑪高橋学1989「石津川・陶器川流域平野の地形環境Ⅱ—小阪遺跡(南その1)の地形環境と土地利用—」『小阪遺跡(南その1)—調査の概要—』(財)大阪文化財センター
- ⑫中村浩1988「陶邑窯跡群における工人集団と遺跡」『古文化談叢』20(上)九州古文化研究会
- ⑬服部文章1997「陶邑」古墳時代集落の動向」『大阪文化財論集—財団設立15周年記念—』(財)大阪文化財センター
- ⑭花田勝広2000「大壁建物集落と渡来人」『古代文化』Vol. 52・5・7 (財)古代学協会
- ⑮樋口吉文1999「茅渟原陶邑」の最近の考古学成果から—陶器山地区北部を中心にして—」『堺市博物館報』18 堺市博物館
- ⑯三好孝一1992「西日本出土の浮線紋土器」『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター
- ⑰森屋美佐子1992「小阪遺跡出土土器の問題点—初期須恵器の時代—」『小阪遺跡』(財)大阪文化財センター

3. 発表要旨(発表者五十音順)

- ①赤木克視1989・12「小阪遺跡の偽壁について」『奈良制研究』5 奈良制研究会
- ②服部文章1986・10「初現的須恵器陶工集団と集落—小阪遺跡(その3)の調査を中心にして—」『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』(財)大阪文化財センター
- ③三宮昌弘1987・6「初期須恵器製作集団の集落—小阪遺跡(その3)を例として—」『第16回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』(財)大阪文化財センター
- ④合田幸美1989・2「小阪遺跡出土の縄文土器について—その6調査区を中心として—」『第19回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』
- ⑤合田幸美1989・11「小阪遺跡出土の縄文土器」『第7回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』

4. 現地説明会資料

- ①(財)大阪文化財センター1986・9「小阪遺跡現地説明会資料—その3調査・K区・L地区」12pp『第15回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』所収
- ②(財)大阪文化財センター1989・11「企画展 近畿道和歌山線・府道松原泉大津線関連第2回発掘速報展—堺市日置荘・福田・小阪遺跡」4pp

5. 図録・コラム等

- ①(財)大阪文化財センター編1989「企画展 第2回発掘速報展—堺市日置荘・福田・小阪遺跡」
- ②(財)大阪府文化財調査研究センター1995「摂河泉発掘資料精選」財団法人統合記念誌

第2節 調査の方法と経過 (Fig.2・3, Tab.5, PLAN.3)

財団法人大阪府文化財調査研究センターでは、2000(平成12)年度、大阪府教育委員会の指導に基づいて、日本道路公団関西支社の依頼を受けた上掲事業に伴う発掘調査を実施することになった。今回の小阪遺跡調査区は、90(平成2)年度に発掘調査が行われた地点(C~D地区13C14C15C6D)旧その3~その4地区の隣接地—車線分という狭小ながら全長120mという長大な調査区の全面調査、最終調査面積約435㎡<掘削土量:機械約155㎡・人力床土約43㎡・人力約244㎡>であった。

今回は、土砂置き場の確保等の問題から、調査区を二分(その1・その2)して工事が発注され、そ

の1・その2の2つの地区を対象とした為、便宜上、前者をA区・後者をB区と現地で仮称した。

調査区の東側延長55mをA区（大字小阪442-4番 一筆）・西側の65mをB区（小阪442-1・471-1・八田北244-1・平井764-2番 四筆）とし、2000（平成12）年6月15日～同年8月31日にかけて全面調査を行った。

調査は、2000年5月30日に小阪遺跡として土工事請負業者と航空測量委託業者が2000年9月22日、10月31日工期で発注された。準備工の後、6月15日にA区（その1）の現地調査を開始した。19日機械掘削、20日人力掘削を始め、29日まで実施した。追加のB区（その2）を29日から開始し、B区は幅員4～1.5mと狭幅地の為、重機を導入しての掘削は不可能と判断され、30日より人力による床土掘削を始め、7月4日包含層の人力掘削に移った。

I面の平面測量は、ヘリコプターの垂直撮影による航空写真測量を全面実施に移し、7月18日に現地撮影を行った。17日、府教育委員会による立会を受け、実動17日間をもって第I面を終了した。19日よりA・B区の第II面掘削を開始すると同時に、B区西半の河道・溝と堅穴住居・柱穴の断削りを開始し、28日迄6日間実施して、記録の後、B区西半を埋め戻した。II面は、手実測によって記録し、8月7日に府教育委員会の立会の後、8月9日にII面の調査を終了した。埋め戻しは、応急的に10・11日、盆休み明けの17～21日をもって行い、後片付け・図化編集・遺物の登録・洗浄作業等を8月中に行った。9月5日、公団との立会で用地を引き渡し、6日、現場を撤収、調査を無事終了した。

9月、調査終了届・遺物発見届等と、平面図の作成・写真整理・台帳類の作成・図面整理・遺物整理・実測を実施、10月以降遺物写真撮影等々、報告書作成作業を断続的に2001（平成13）年3月31日迄行い、本書を刊行する運びとなった。

具体的な調査方法は省略するが、空中写真測量図化と調査の地区割りについて少し述べておく。平面



Fig. 2 調査地位位置図（1：2500図郭制）

図の作成は、写真測量図化を採用し、AS350型ヘリコプターからのRC-10（15/23）カメラ210mmレンズ使用による空中写真測量図化（1/200撮影・1/20図化）は、遺構の図化と共に、主曲線5cmコンタ・単点上天端下天端各4点を求めるといふもので、撮影高度は42m・140ftで実施する。

遺跡の位置・調査区内の地区割りを示すのに、1968（昭和43）年建設省告示3059号規定の国土第VI座標系を基軸に使用し、大阪府発行〔1984（昭和59）年建設省国土地理院承認〕1：2500地域計画図の図郭制を基にした最小4×4mの区画までを示す

方法を考案している。これによって大阪府下全域を最低4m四方のグリッドで網羅できる全国的にも画期的なもので、総て、1985（昭和60）年に最低限の調査精度を確保する目的で作成した『発掘調査規定』Vol. 2に準拠する。

ちなみに、今回の調査対象地は、地域計画図（地形図）の大E-5-9 Kに該当する。大E-5-9を

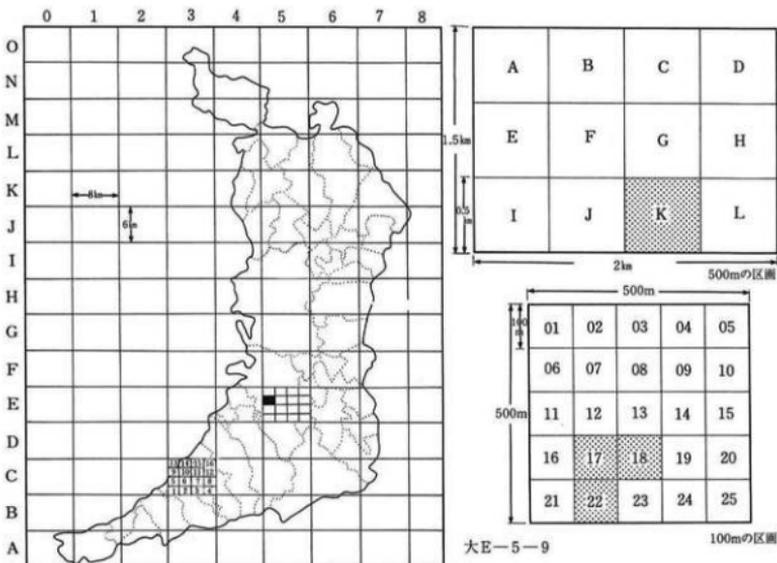


Fig. 3 大阪府地域計画図を利用した地区割り

500×500mの12に方眼区画（A～L）したKにあたり、Kを100×100mに25区画（01～25）した17・18・22に該当している。それを1辺25等分した縦列・横列A～Yの625区画の4×4mグリッドができあがる。つまり大E-5-9 K22AB等と表される地点呼称で遺物は取り上げられ、遺構の位置は表示される。

調査区をA・B区と仮称したことは述べたが、土層の確認は、各壁面の土層によって観察し、幅1.0～0.5mを基準として深掘を行い、土層の把握と遺構・遺物の有無の確認にも努めた。深度の関係からも、弥生時代以前の自然堆積層の完掘は控えた。

尚、調査区K18OC交点での座標は、 $X = -164856.000\text{m}$ ・ $Y = -46792.000\text{m}$ 、緯度・経度では、 $B = 34^{\circ}30'45''7541$ ・ $L = 135^{\circ}29'25''1465$ 。K22 F J地点では、 $X = -164920.000\text{m}$ ・ $Y = -46864.000\text{m}$ 、 $B = 34^{\circ}30'43''6650$ ・ $L = 135^{\circ}29'22''3360$ であった。又、座標北から磁北へ西偏 $6^{\circ}2'0''$ 、真北には東偏 $N = 0^{\circ}17'20'' \sim 0^{\circ}17'21''$ を測った。

第Ⅱ章 小阪遺跡を取り巻く環境

「陶邑」の古墳時代集落概観 (Fig.4, PLAN.2・6)

大阪南部古窯址群 (略して阪南古窯址群)、通称「陶邑」古窯址群は、ヤマト政権の下で展開された数百年間にもおよぶ須恵器の一大生産地であった。1960年代より具体化した泉北ニュータウン建設計画を契機とし、窯跡を中心とする分布調査や発掘調査が数多く実施に移されている。それによりもたらされ



Fig. 4 小阪遺跡範囲と周知の隣接遺跡

た膨大な出土資料を分析することで、個々の窯型式による我が国の須恵器編年が確立され、考古学が大きく進展した。窯の時期的分布状況が明らかとなり、窯の変遷を具体的にたどることが可能となった。また、消費地から出土する資料に一定の時間的尺度が与えられることとなった。この他「陶邑」古窯址群についての研究は、自然科学など多様な角度から検討が加えられ、それぞれ興味深い成果が示されている。

こうした状況のもと、周辺部では、泉北ニュータウンの造成後も徐々に進行してきた大規模開発に加え、道路建設等が急ピッチで進められ、それらに先立つ埋蔵文化財の発掘調査も数多く実施されている。それらの中には、須恵器生産と密接な関係を示す集落に関する調査例も認められ、興味深い新知見もたらされた。しかし、発掘調査が主に丘陵部の開発に伴って実施されたため、窯そのものに関するものが多く、周辺に存在するであろう集落や古墳（墓地）に関する資料はさほど多いとは言えない。言い換えれば、「陶邑」古窯址群が千基にも及ぶ窯で構成されたことが明らかとなった今日においても、それを支えるべき工人集団の集落や墓地の実態については依然として不明な点が多く残されているのが現状であると言えるのである。

今回、小阪遺跡以外の検出されている周辺集落を以下に概観する。

1. 太平寺遺跡

梅丘陵東北部に位置し、府道の調査で石津川の旧河道・それによって大半を削られた古墳時代中期の遺構面が検出されている。遺構は、前後関係をもつ1間×1間の建物2棟（堅穴住居か）、出土遺物からTK208型式期前後の限られた期間に営まれた集落と考えられる。約200m東方の小阪遺跡A地区調査区には連続する遺構面が認められないことから、さほど大きくない集落規模と判断される。

出土した多数の須恵器には、渡来系要素の濃いものが含まれる。

2. 万崎池遺跡

梅丘陵北部～東北部、中位段丘面の標高24m前後に位置する。第IV調査区では、堅穴住居14棟・掘立柱建物3棟・井戸状遺構・溝などで構成される古墳時代中期の集落が検出されている。出土遺物の大半は土師器で、須恵器出現前段階、布留式期を中心として営まれた集落と判断されるが、その最終段階においては、住居跡や谷部から検出した数点の初期須恵器・陶質土器を伴っている。

総数500基以上からなる古墳時代中期の土壌葛群にあっては、須恵器を伴うものが多い。

小阪遺跡のように、軟質系土器の出土及び不良品を多数伴う状況は認められず、須恵器生産の開始に直接関わったというより、「陶邑」における須恵器生産開始前段階に土着的に存在した集落と言えよう。西方に、菱木下遺跡が位置する。

3. 伏尾遺跡

高藏（泉ヶ丘）丘陵の北端、標高30m前後の丘陵上～陶器川に面した平地斜面部に展開する遺跡。その3・4-1、1-I区・II区では、5世紀中葉のTK216～TK208型式期に営まれたと判断される数十棟の掘立柱建物が検出されており、小阪遺跡等に比べ大規模・規則的配置をとった可能性が高い。集落はTK216型式期に始まるが、中心的時期はTK208型式期に営まれたものと考えられる。

集落からの出土遺物は、一部軟質系土器も含むがほとんどが須恵器である。

集落構成集団に渡来系集団の関与は認められるもののヤマト系への変化（列島化）があったと理解できるとの指摘がある。

下池谷を挟んだ南側の4-2・1-Ⅲ区は墓域と見られ、一辺15~10m前後の古墳(5世紀後半)6基が確認されている。また、谷を隔てて、前方後円墳を含む小代古墳群が展開する。1-Ⅲ区検出の土坑群は6世紀後半のもの。

4. 大庭寺遺跡

石津川左岸、梅丘陵北東部縁部の標高28m前後の低位段丘面上に広がる遺跡である。竪穴住居：6棟、溝・土坑・土器溜り(1・393-OL)・旧河川と2間×2間・2間×3間の総柱・その他規模の不明なものも含め、計10数棟の掘立柱建物が発出されている。また、TK73型式に先行する最古型式の初期須恵器窯2基(TG231・TG232)の存在が確認されている。窯跡側で検出された土器溜りからは、最古型式の初期須恵器や軟質系土器が多数出土した。掘立柱建物群を中心に構成された遺跡は、5世紀代(TK208型式期前後)を通じて営まれたものと考えられる。

集落出現当初の土坑からの出土は初期須恵器や韓式系土器と陶質土器の系譜が色濃く、その後は他の「陶邑」集落同様、急速に列島化していくようである。一方、TK73~TK216~ON46・TK208型式期を通じて軟質系土器の占める割合が強く、日常的に使用していたと考えられる。

列島化しながらも、伝統的に渡来系系譜を強く引き継ぐ集団により経営された、生産・選別・流通、そして居住に関わる大規模な初期須恵器生産地であったと推定される。

5. 深田遺跡

泉ヶ丘丘陵東縁部(TK地区窯跡群)と梅丘陵(TG地区窯跡群)との間、上神谷主谷に向かった新池谷支谷開口部の氾濫原前面の平地部に広がる遺跡である。計3回以上の建て替えが認められる東柱を伴う2間×2間・2間×3間の総柱の掘立柱建物(倉庫か)3~4棟・溝・槽列、破損・焼け歪などの認められる須恵器が多数出土し不良品の廃棄土坑かとの見解が示されている4.6m×2.8mの隅丸方形土坑などが検出されている。

石津川沿いという水運上の好条件や遺構の性格などから、各窯で焼成された須恵器を集積・選別する役割を担った集落と位置づけされる。居住地としては好条件とは言えない氾濫原低湿地地上の集落で、TK208型式期前後の短期間に限り営まれており、大規模な集落が展開するとは考えられない。

6. 豊田遺跡

3ヶ所で調査が実施されている。石津川上流右岸の氾濫原上では、破損・焼け歪の認められる須恵器が多数出土している6世紀中頃の土坑の他、5世紀後半・6世紀後半の土坑・6世紀中頃の溝が発出されている。大蓮池支谷開口部北側の低位段丘面上では、5世紀後半から6世紀初頭にかけて(TK23~TK47型式期前後)の重複関係が認められる2棟を含む2間×2間：2棟・2間×3間：1棟の掘立柱建物が検出されている。

約1.2km北方にある深田遺跡よりやや後出して成立、構成が類似していることから、豊田遺跡集落でも須恵器の集積・選別を行っていた可能性が指摘されている。

7. 野々井遺跡

和田川右岸、梅丘陵北端部の丘陵尾根部・谷部に位置する遺跡。竪穴住居・掘立柱建物・古墳群・火葬墓・窯跡等が発出された須恵器生産開始以前の古墳時代前期~奈良・平安期、中世期におよぶ遺跡である。

古墳時代後期の集落は、遺跡中央部の尾根上(第3調査区A地区：竪穴住居2棟・掘立柱建物8棟)、北半部の尾根上(第3調査区C地区~第5・第6調査区：竪穴住居3棟・掘立柱建物16棟)、北西部の

尾根頂部よりやや下った緩傾斜地（第4調査区：掘立柱建物13棟）の3ヶ所に営まれている（第3調査区D地区南部においても、2間×2間の掘立柱建物2棟を復原し得るピット群が在り、この部分にも集落が展開した可能性がある）。それぞれ、掘立柱建物を中心に構成される。遺跡は、5世紀後半～6世紀後半頃（TK208・ON46～TK10型式期前後）まで長期的に存続しており、梅地区の中心的な集落と考えられる。

出土遺物の大半は須恵器で、軟質系土器は含まれない。

以上集落は、遺跡中央部を南から北西に伸びる主尾根上に構築された墓塚（野々井古墳群）を取り囲むように形成されている。前方後円墳・円墳・方墳で構成され、内部構造は、横穴式石室・木棺直葬・横穴式木芯粘土室（カマド塚）等、多様である。

集落の運営と同時に操業していたであろう窯は、遺跡南東に位置するTG10号窯以南に、集落に先行する5世紀代のもの（TG225号窯）と、後出する7世紀代のもの（TG222・TG223・TG224・TG226号窯）とが、遺跡に隣接して分布する。

8. 菱木下遺跡

梅丘陵北部、和田川右岸の段丘面上に立地する遺跡である。第I調査区（標高約24m）で検出された古墳時代後期の遺構：竪穴住居2棟・2間×2間総柱を含む20棟の掘立柱建物は、6世紀後半（TK10型式期）から8世紀（TK48型式期）にかけての集落を構成する。第II・III調査区では、須恵器を副葬した古墳時代の土壌墓が確認されている。西浦橋遺跡と一連のものと判断される。

9. 西浦橋遺跡

梅丘陵西北端の段丘西側縁辺部、東半は洪積段丘・西半は北流する和田川の氾濫原に展開する遺跡である。台地西側の段丘崖周辺部で古墳時代中期～後期の集落が検出されている。5世紀後半（TK208・ON46型式期）の竪穴住居2棟、5世紀末～6世紀前半にかけての竪穴住居7棟・2間×2間の総柱の掘立柱建物1棟、6世紀後半の竪穴住居3棟。竪穴住居は全て一辺4m内外と小規模で、かつ、短期間に建て替えが繰り返されていることから、「従属的な性格の村や、非日常的な村である可能性」が指摘されている。

初期須恵器をはじめ、多数の遺物が採集されている。

10. 鶴田池東遺跡

ON地区の須恵器窯が分布する和田川左岸、檜尾丘陵東北端の段丘東側縁辺部段丘上（比高差6～7m）に立地する遺跡である。古墳時代後期・6世紀後半の竪穴住居2棟・2間×2間（総柱を含む）の掘立柱建物群・古墳周溝・土壌・井戸等が検出されている。

11. 山田北遺跡

谷（現在の新池）を挟んだ対岸にあたる山田遺跡と鶴田池東遺跡との中間、ON地区に位置。TK208・ON46型式期（5世紀後半～6世紀）のピット群が確認されている。周辺の畑地には同時期の須恵器が多量に散布している。農耕機による開墾時に一辺6m前後で方形の褐色土の広がりが見られ、竪穴住居を伴う集落の存在する可能性が高い。

12. 山田遺跡

鶴田池東遺跡の南約1kmのON地区、和田川左岸の檜尾丘陵東縁部高位段丘面に5世紀末葉（TK23型式期）～6世紀の遺物が多量に散布、かつて工場建設時に、竪穴住居の存在が確認されている。実態については不明点が多い。

13. 辻之遺跡

陶邑MT地区、陶器川に近い段丘上に位置する。TK208・ON46型式期（5世紀後半）～7世紀の2間×2間の倉庫と考えられる総柱建物等53棟の掘立柱建物、溝・土坑・井戸等2000を越える遺構が検出されている。TK23・TK47～MT15型式期を中心とした膨大な量の須恵器が出土した反面、土師器は皆無に近い。

出土する須恵器に破損や焼け歪などの不良品が数多く含まれていること・“ヘラ記号”のある須恵器が多く、それも10種類以上に及ぶこととともに、遺跡の構成遺構等から、豊田遺跡・深田遺跡等と類似した“流通”的役割を担った集落と指摘される。

14. 田園遺跡

陶邑MT地区の北西部、高津池支谷を挟んだ対岸の辻之遺跡の南側、標高60～50m前後の段丘上斜面に立地する。古墳時代～中世の掘立柱建物27棟・溝・土坑・土器溜り等が検出されている。土器溜り等の遺構から焼成不良や欠損・焼け歪・窯壁付着等不良品が多数出土しており、辻之遺跡等と類似した性格が想定できる。

時期は、TK208・TK23型式期に限られ、周辺の集落に先行する。

15. 小角田遺跡

MT地区の北端部、阿弥陀池支谷北側の標高80～70mの段丘上に位置する遺跡。主として総柱建物で構成される掘立柱建物群と土坑・溝などが検出されている。倉庫と考えられる2間×2間を主体とするが、内1棟は掘方1m×0.8mを測る柱穴で構成される3間×3間プランの大規模なもの。6世紀後半～7世紀初頭の集落。

多量の破損・焼け歪・窯壁付着等の土器を出土した土器溜状の溝・土坑も検出されている。こうした状況から、深田遺跡等同様、「須恵器の集積・選別・搬出を行うための基地」とする見解が示されている。

TK10型式期以降、TK43・TK209・TK217・TK46型式期までと考えられる。

16. 陶器南遺跡

MT地区のほぼ中央部に位置する。台地平坦面のほぼ全域に集落の広がりが確認されており、遺跡南西部分では、古墳時代後期の掘立柱建物・楯列・溝・土坑などが確認されている。中でも、第二地区では、中核となる3間×6間の大型建物や、辻之遺跡等で検出されたのと同様な、小溝に囲まれ、隅丸方形ないし楕円形の柱掘方をもつ総柱掘立柱建物の倉庫を中心とした16棟の建物、焼成不良の軟質土器等の須恵器を投棄した溝等が検出されている。

時期は、6世紀後半（TK10・TK43・TK209・MT85型式期）に限られ、以降に存続した形跡は認められない。

多量に出土した須恵器の多くに焼成不良・焼け歪が見られること、焼台等の須恵器生産道具が多く検出されていること等から、須恵器生産集団の集落との見解が、他の集落にも増して強く認められる。

また、周溝などからの鋸歯文状線刻滑石製紡錘車の出土や、この溝に並び立てられた須恵器など、集落内での祭祀の痕跡が確認されている。

註記

- 註① 須恵器生産地としての遺跡名称として使用されている。元来、その茅渚縣「陶邑」と『日本書紀』崇神天皇条に登場し、呼ばれた地域は陶荒田神社を中心とする陶器川流域の陶器地域であったと思われる。1960年後半に行なわれた分布調査の成果より、水系によって、齋路の地区名、「高蔵寺TK・陶器山MT・富蔵TM・樽TG・光明池KM・大野池ON・谷山池TN」の7地区が与えられる。古窯跡は、堺市・和泉市・大阪狭山市・美原町の東西10km・南北5kmの泉北丘陵地帯の広い範囲に当たる。しかし、齋路以外の遺跡や古墳などは、その縁辺部から平野部にかけても無数に広がりを見せ、居住地や工房としての機能を持つ集落や墓域などを含めた遺跡群としての「陶邑」の名をもって全体の範囲を明確に示すことは困難である。特に石津川水系に沿って大阪湾を望む一帯には、個々に消長を示しつつ古墳時代の集落が点在し、四ツ池遺跡をはじめとする海浜部の遺跡群へと連なっている。従って、ここで言う「陶邑」における集落とは、まず立地場所からみて「陶邑」古窯址群との関連を強く示す地域、すなわち泉北丘陵地帯と齋路の分布が希薄となるその縁辺部、さらにそれに続く段丘面上付近までで立地し、須恵器生産開始以後、須恵器生産に間わりをもった集落を指すこととしておきたい。
- 註② 堺市教育委員会1983「太平寺遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告第13集』、(財)大阪文化財センター1984「太平寺遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』
- 註③ 大阪府教育委員会1984「万崎池遺跡発掘調査概要—府道松原・泉大津線建設に伴う—」、(財)大阪文化財センター1984「万崎池遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』
- 註④ (財)大阪府埋蔵文化財協会1990「陶邑・伏尾遺跡—A地区—」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告60輯・同1992「同II」同72輯・(財)大阪府文化財調査研究センター1997「同III」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書20—1集・同1998「大庭寺・伏尾遺跡—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—」同第27集
- 註⑤ (財)大阪府埋蔵文化財協会1989「陶邑・大庭寺遺跡I」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告41輯・同1990「同II」同50輯・同1993「同III」同75輯・同1995「同IV」同90輯・(財)大阪府文化財調査研究センター1996「同V」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第10集
- 註⑥ 大阪府教育委員会1972「陶邑・深田」大阪府文化財調査抄報第2輯
- 註⑦ 大阪府教育委員会1982「泉北丘陵内遺跡発掘調査概要—池田寺跡、須恵器窯跡、豊田遺跡—」、(財)小谷城郷土館・豊田遺跡調査会1999「豊田遺跡現地説明会資料」
- 註⑧ 大阪府教育委員会1977「陶邑II」大阪府文化財調査報告29輯・同1979「同IV」同31輯・同1987「同VI」同35輯
- 註⑨ (財)大阪文化財センター1984「菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』、大阪府教育委員会1985「菱木下遺跡発掘調査概要I—都市計画道路松原泉大津線建設に伴う—」、堺市教育委員会1985「西蒲橋・菱木下遺跡発掘調査報告」『堺市文化調査報告第22集』
- 註⑩ 大阪府教育委員会1980「西蒲橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」・同1981「西蒲橋遺跡発掘調査概要—府道松原・泉大津線建設に伴う発掘調査—」、堺市教育委員会1983「西蒲橋遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告第12集』・同1985「西蒲橋・菱木下遺跡発掘調査報告」『同第22集』、(財)大阪文化財センター1984「西蒲橋遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』・同1984「同II—西蒲橋遺跡—」
- 註⑪ 大阪府教育委員会1980「西蒲橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」・同1982「鶴田池東遺跡発掘調査概要II—府道松原・泉大津線建設に伴う—」
- 註⑫ 大阪府立泉大津高校地歴部1959「山田遺跡の住居址とその附近」『和泉考古学』4、真鍋昌宏1976「堺市山田遺跡出土遺物の整理について」『摂河泉文化資料』3 北村文庫会、森浩一1978「山田遺跡」『大阪府史』第1巻 大阪府、服部文章1990「山田北遺跡の調査」『第21回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』(財)大阪文化財センター
- 註⑬ 註⑫に同じ。
- 註⑭ 堺市教育委員会1982「辻之遺跡現地説明会要旨」、石田修・十河稔郎1983「堺市辻之遺跡の調査」『考古学ジャーナル』214 ニュー・サイエンス社
- 註⑮ 堺市教育委員会1983「田園遺跡発掘調査中間報告書」・同1984「田園II—西陶器小学校拡張用地内発掘調査報告—」『堺市文化財調査報告第19集』
- 註⑯ 堺市教育委員会1984「小角田遺跡現地説明会資料」・同1988「陶器・小角田遺跡」『堺市文化財調査報告第33集』・同1988「小角田遺跡」『同第38集』・同1991「陶器・小角田遺跡」『堺市文化財調査概要報告第11冊』・同1992「陶器・小角田遺跡」『同第32冊』・同1995「小角田遺跡発掘調査概要報告」『同第52冊』
- 註⑰ 大阪府教育委員会1996「陶器南遺跡発掘調査概要II」・同1997「同III」

第三章 調査の結果

第1節 層序と概要 (Fig.5~7、巻頭カラーII、PLAN.1、PL.7~10)

A区は、元水田層上に歩道面まで盛土された土建業者の資材置き場。B区は、水田耕作地で、その西半部は植木畑となっていた。但し、調査開始直前にB区の耕作土の一部が新たな畦畔土として除去されていた。調査地は、五筆の田圃区画の幅5~2m・長さ120mであった。

0層：盛り土層。A区資材置き場の工事廃土及び植木畑の真砂土客土。A区の盛土の厚さは1.0~0.8m。

1層：水田層。耕作土と共に床土が観察された。現代耕作土の厚さ0.2m (1a・b層)。さらに旧耕作土の灰色耕土が0.05m・赤褐色床土が0.02m確認できた (1c・d層)。A区西半部・B区東半部の古墳期の遺構面は、1層直下で確認された。B区東端部は、調査区を横切る条里型水田大畦畔部分にあたり、新旧の攪乱も多い。1層の出土遺物は、土師質土器〔1〕 炮烙、陶磁器〔2〕 肥前陶器碗・〔3〕 堺摺鉢、瓦〔4〕 布目瓦などがあつた。中世期・近世後期から近代の陶磁器細片と古墳時代須恵器細片とを微量認める。

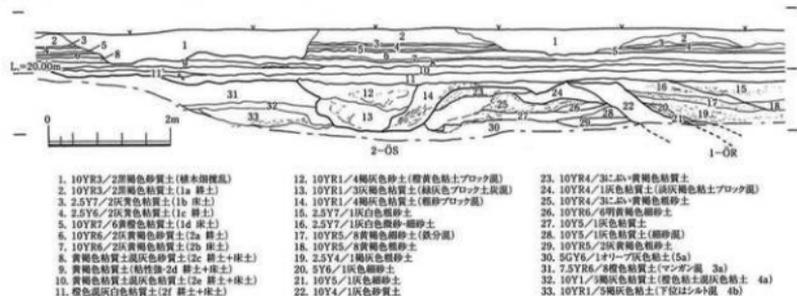


Fig. 5 基本土層図 (1-OR~2-OS)

2層：中世水田層。B区西半水田で確認された新旧の中世水田客土。4面の床土を交えた水田層が確認された (2a・b・c・d層)。客土中には、瓦器・土師器・須恵器の細片が包含されている。古墳期遺構面は、水田の造成に当たって削平されていた。鎌倉期のⅢ-2~3 (13世紀前半) 型式の瓦器を多く含むが、下限は14世紀後半の瓦質土器の時期である。中世でも新しい時期の素掘り井戸1基 (4-OW) と水溜1基 (3-OW) とを畦畔で検出。2層出土の代表的な遺物は、〔5〕 京都系カワラケ、〔6〕 瓦器Ⅲ・〔7〕 炭素付着の悪い瓦器碗・〔8〕 同底部、〔9〕〔10〕 土師質羽釜、〔11〕 口縁部「く」字形の土師質甕、〔12〕 瓦質片口の摺鉢・〔13〕〔14〕 口縁部「く」字形の瓦質摺鉢・〔15〕 口縁部丸味をおびる摺鉢、〔16〕〔17〕 須恵質甕口縁部・後者は端部で折り曲げている。〔18〕 は東播磨系の須恵器の片口、〔20〕 はセピア色の須恵質甕。〔19〕 は、地元の瓦質甕体部、表面タタキ・内面ハケ仕上げ。〔21〕 は、輸入白磁である。その他に古代・古墳期の遺物も目立つ。〔22〕~〔24〕 は、平瓦。22は須恵質の布目瓦。23の裏面は焼けている。24は須恵質で表布目・裏面縄目を認める。〔25〕 は軟質韓式系土器口縁部、〔26〕 TK10型式須恵器灯蓋・〔27〕 透かし2方が確認される長脚高坏、〔28〕〔29〕 須恵器坏身MT15・TK10型式。〔30〕 須恵器坏身・〔31〕 須恵器高坏の脚部分、摩擦激しい。

3層：黄褐色粘質土層 (水田造成以前の自然堆積層)、古墳期の遺構面ベース層である。第I面として調

査を行った古墳期の遺構上面には、かすかなマンガンの沈着層が検出される。層自身は灰色粘質土がグライ化されたもので、グライ化の度合によって上下2層に大別できる。上層の3a層は灰色混じりの黄褐色粘質土～黄褐色粘質土で、下層の3b層はマンガンが混る灰黄褐色粘質土。両層にもほとんど遺物の包含は認められないが、[32][36]の弥生土器壺の底部の破片が出土した。後者は、生駒西麓産の胎土を持つ中期のものであろう。尚、[35]も生駒西麓産の胎土を持つ2層の混入土器。

4層：上下2層を確認できる。上層の4a層は灰白色粘質土で湧水堆積層である。グライ化が進行し、上部ほど橙色がかかる部分が認められる。4a層と3b層ないし3c層との間には、流水痕跡として灰色細砂のバンド状堆積をはじめ、調査区を横切る溝状の流路が確認され、第Ⅱ面として調査を行った。4b層は、灰白色シルト～灰色粘土でグライ化が進行している。4a・4b層間にもA区でラミナの流水痕跡が確認でき、一時期、地表面であったと考えられる。4層からは微量ながら弥生中期と思われる弥生土器片が出土し、弥生期の堆積と判断された。また、B区東端で幅9m程度の自然河川と思われる落ちが4b層を切り込んで確認された。埋土は、上面茶褐色混灰色粘土の滲水層でバックされているが、細砂がバンド状に挟まれた暗灰色粘土混細砂。自然流水の流路と判断される。4層からは、[33][34]の和泉産の胎土を持つ弥生土器体部の破片と[37]黒斑を有する和泉産の壺底部があった。

5層：5層は青灰色シルト～粘質シルトをベースとする層である。5層と4層との間は、微砂・細砂ラミナの自然流水が確認される。また、5層を切り込んで弥生期に埋没したと考えられる灰色粗砂・細砂を埋土とする自然河川がA区中央部に存在するようである。遺物は出土・確認しなかったが、半砕された自然丸太材の流木がバックされていた。先端の片目が焼け焦げていたが、加工痕等は特に確認できない。5層は、完掘は実施していないが、周辺遺跡調査成果からすると、縄紋晩期の突帯紋期に相当するようである。

以上であるが、設計深度以上の面的調査は必要なしと判断されたもので、4a層上面の第Ⅱ面以下は、側溝の断ち割りトレンチで下層の土層を確認することにとどめた。何れにしても、土層の形成と共に流路や落込みなどのすべての遺構は、自然の河川（旧陶器川・旧石津川）氾濫に伴って形成されたものと判断される。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

第Ⅰ面として古墳時代中期の集落跡を検出した。主要な遺構として、竪穴住居跡1棟・平地式住居跡1棟・掘立柱建物跡8棟（OB-1～8）と、それらに関連する溝4条・土坑6基・落込みと河川跡とを確認した。切り合い関係と軸線方位から大きく3時期の時期差を見てとれた。それぞれA期・B期・C期とする。

出土遺物は、相対的に微量で遺構からも細片としてのみしか確認できないが、溝2-OS・6-OSの埋土・覆土中より比較的多くの出土があった。時期的には、田辺編年TK216～TK208・TK23～TK47・MT15～TK10型式期を中心とする時期に比定されるようである。朝鮮系軟質土器も含まれている。出土遺物は遺物収納用コンテナにして7箱であった。

掘立柱建物（Fig.6～10、PL.3～6）

8棟を認識した。柱掘方の径は概ね0.3～0.4m・深さ0.25～0.4m・柱痕は径0.15m前後としっかりしたものである。調査区内では3ヶ所にかたまる傾向があり、それら地点の建物群で3つのグループを構成する様である。ただし、狭小調査区の関係で、全容が判明できる掘立柱建物は少なく、既往の小阪

遺跡C地区調査データより推定復元検討したものである。以下、A・B・C期と表すが、新旧関係の順ではなく、建物軸線方位・柱間スパンから、A：小阪C地区掘立柱建物1（N-64°-E・1.55・1.75m）・B：小阪C地区掘立柱建物2（N-78°-E・1.96・1.80m）・3（N-73°-E・2.15m）・C：小阪C地区掘立柱建物4（N-52°-E・1.80・1.90m）に対応させる。

OB-1（30・31・32・33・34・35・36-OP）2間×2間（C期）

A区西部で東西2間×南北2間の建物を確認した。柱間距離は、西南西～東北東1.56m・北北西～南南東1.68m。建物面積は10.5㎡で、方位はN-53°-Eをとる。柱掘方は概ね径0.45～0.40mの楕円形を呈するもので、明黄褐色粘質土。柱痕は概ね0.25mの円形、埋土は褐色粘質土であった。32・33・35-OPでは柱抜き取りが確認された。遺物は柱穴からは出土しなかったが、直上の包含層には須恵器が微量含まれていた。

OB-2（14・18-OP）2間×1間以上（C?期）

A区西部のOB-1西側で建物の南辺を確認した。側道工事の破壊等で全容を確認した訳ではないが、南西～北東2間×北西～南東1間の建物を考えておきたい。方位はN-40°-Eを考える。南辺の柱間距離は2.01m、A区北辺で検出した39-OPは、柱掘方0.31m・深さ0.40m、柱痕径0.22mとしっかりとしている。他の柱掘方も概ね0.35m内外の楕円形、柱痕は0.23m前後を測る円形。埋土は、OB-1と似かよう。柱穴18-OP内より、須恵器の細片が出土したにすぎない。

OB-3（39-OP）1間×1間以上（A期）

大半が調査区外の為、全容は明らかでないが、小阪C地区とにわける建物を想定しておきたい。方位はN-65°-Eを考える。

OB-4（20・23-OP）1間×1間以上（B期）

B区中央部で検出した東西1間×南北1間以上の建物。N-73°-E。柱掘方0.3m・深さ0.45m、柱痕径0.22mの円形でしっかりとした柱穴である。東西の柱間距離は1.86m。23-OP柱穴掘方より、土師器の細片が出土した。

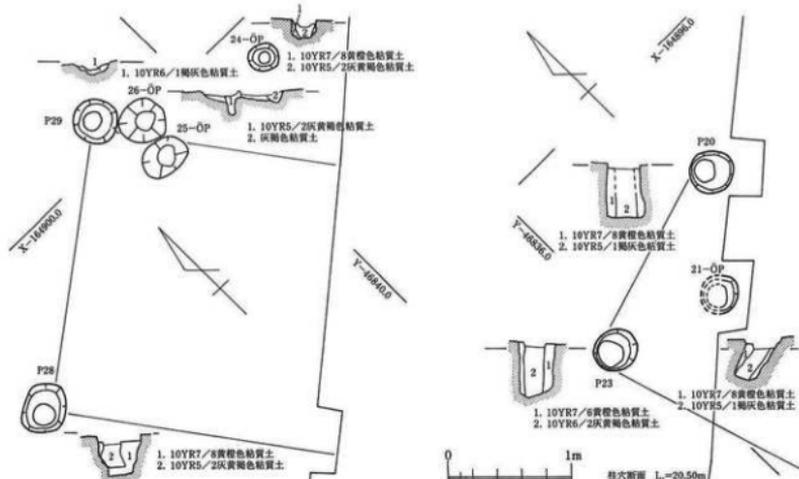


Fig. 9 掘立柱建物OB-4・5

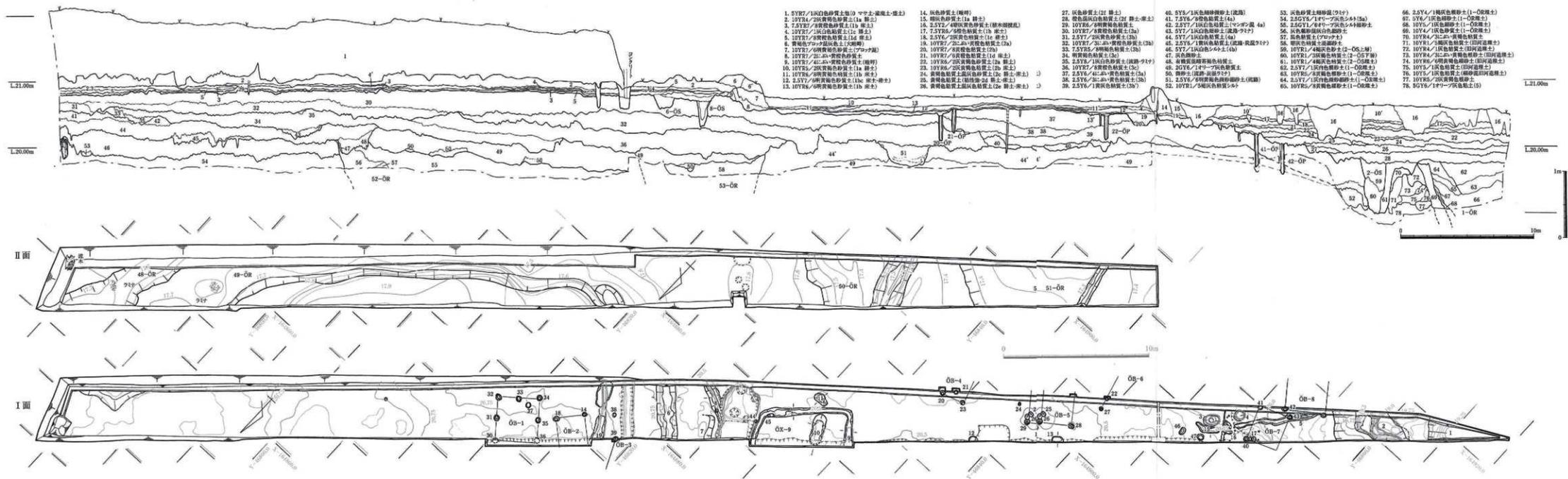


Fig. 6-7 遺構全図及び全体土層断面図

OB-5 (29・28-OP) 1間×1間以上 (C期)

B区中央部で検出した西南西～東北東1間×北北西～南南東1間以上の建物。調査区外に延びる為、全容は明らかでない。西南西～東北東の柱間距離は2.34m、方位はN-53°-Eを考える。柱掘方は径0.35m内外の円形を呈し、29-OPは深さ0.10mとやや浅い。28-OPは深さ0.33m、柱痕は径0.2m内外であった。28-OP掘方より須恵器・土師器細片がまとめて出土した。

OB-6 (27・22-OP) 1間×1間以上 (B期)

B区中央部で検出した柱列。調査区外に延びる為、全容は明らかでない。柱間距離は0.86mと他のほぼ半分であり、櫛の可能性もあるが、建物とみておきたい。柱掘方0.24m・深さ0.25m前後、柱痕径0.15mであった。柱穴より土器片は出土しなかった。方位はN-73°-Eを考える。

OB-7 (40・41・43-OP) 1間×1間以上 (B期)

B区西部、河川よりで検出した。竪穴住居16-ODと切りあい関係にある掘立柱建物で、東西1間×南北1間以上の建物。柱間距離は南北2.7m・東西2.3m、N-70°-E。柱掘方は概ね径0.45～0.35mの楕円形を呈するもので、明黄褐色粘質土、柱痕は概ね0.2m前後の円形、埋土は灰黄褐色粘質土であった。40-OP掘方より土師器高坏などの破片が出土した。

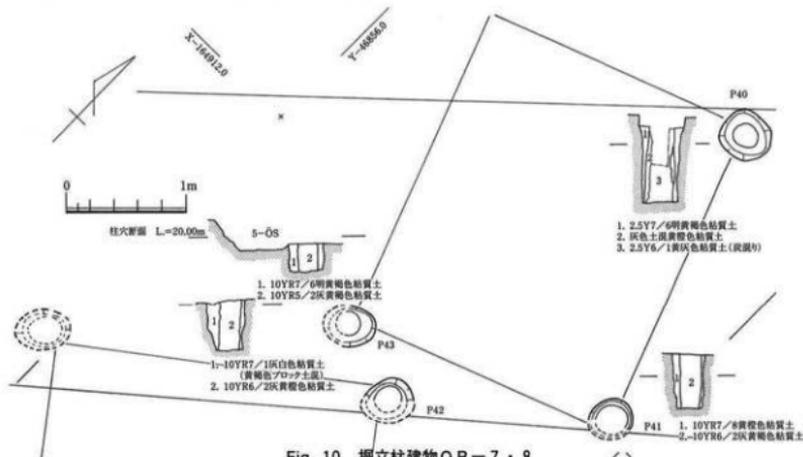


Fig. 10 掘立柱建物OB-7・8

OB-8 (42・42'-OP) 1間×1間以上 (C期)

B区西辺のOB-7南辺で42・42'-OPを確認した。7-OBと柱列がそろわないので別の建物を想定しておきたい。柱間距離は2.65m、N-52°-E。柱穴は、柱掘方0.3m・深さ0.44mの円形、柱痕径0.25mでしっかりしたもので、埋土は、掘方：灰白色粘質土・柱痕：灰黄褐色粘質土であった。遺物は特に出土しなかった。

竪穴住居 (Fig.11, PL.6・7)

16-OD (5-OS・17-OP)

B区西の河川よりで確認した竪穴住居である。西半と南とは中世期の耕作地造成によって失われ、北

は調査区外で擾乱が及んでいる為、全容が判明するわけではない。住居のプランとして検出したのは、東辺の2.6m分で、立ち上がりは0.15m前後である。全面炭・灰土で覆われていたので、焼失住居と推測する。既往の調査で確認された土坑と繋がり一連をなすと考えられ、南西～北東4.8m前後×北西～南東(竈を想定する壁面)4.8m、N-55°-Eを想定する。

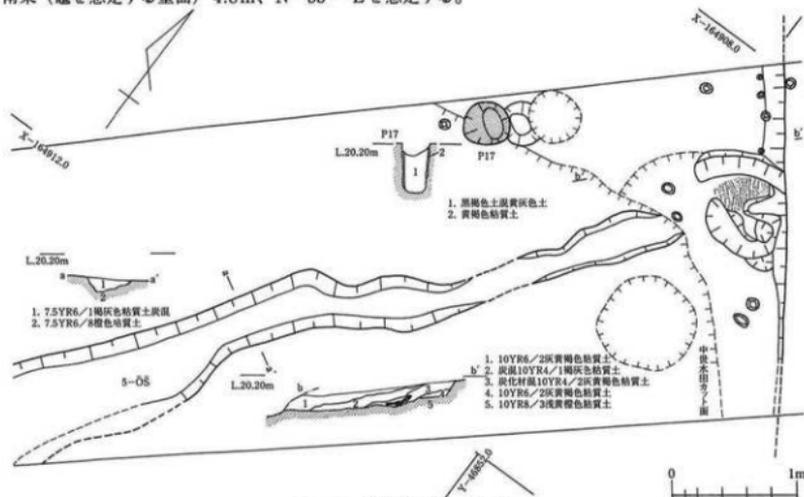


Fig. 11 竪穴住居平・断面図

主柱は、北で確認した径0.2m・深さ0.4mの17-OPがそれにあたると思われる。南の主柱は、耕作時の素掘り戸等で破壊を受けていると判断され、確認されない。位置関係から2本柱の可能性はある。壁溝は確認されないが、立ち上がり部に沿って径0.05m・深さ0.15m程の坑状の小穴が6穴程ならんでおり、壁材を構成するものであろう。遺構覆土も耕作地での畦畔付近にあたる為、大きく擾乱がおよんでいたが、壁中央部のくぼみ底部では比較的多くの焼土・炭を混じえていたので、竈を想定したい。ここから住居外へ延びている溝(5-OS)は、擾乱されて途切れながらも河川に向かっていった。溝は、依存状況の良い所で幅0.3m前後・深さ0.12m、断面舟底形。住居に伴った排水溝と判断される。5-OSからは、須恵器坏や土師器・須恵器破片が比較的まとまって出土。ただし、擾乱部で瓦器と瓦質羽釜3片が混入していた。

よって、柱穴・竈・溝の位置関係から、一辺4.0～3.5m前後の方形竪穴住居を推定復元できよう。17-OPの横で確認された40-OPは、深く掘りこまれた掘方に炭土が含まれていたため、掘立柱建物との切り合い関係が考えられる。

遺物は、焼土・炭層と共に須恵器・土師器小破片が覆土より出土、主柱17-OPよりも須恵器・土師器破片の出土があった。

平地式住居 (Fig.12, PL.4・5・11)

(9-OS・45・44-OP)

B区東寄りで「コ」字形に巡る溝を確認した。溝は、削平が激しく浅いものとなっているが、おおよ

そ幅 0.55m・深さ 0.5~0.2m内外で、それぞれの長さ南辺 6.5m、現西辺 2.3m・東辺 2.0mである。東辺は、攪乱が激しかった為ややいびつに開くが、概ね方形に巡るのであろうと推定される。東南コーナーに溝底から掘り込まれた柱穴状の2穴(45・44-O P)と溝底の径 0.05mの杭穴が不規則に存在する。北側は調査区外となる為不明であるが、全周する溝が長方形の大壁住居の一種と考えられる。ここでは、平地式住居と称しておきたい。溝埋土は、明黄褐色砂質土であった。

遺物は、9-O S内より土師器の細片とミニチュア碗が出土したのみで、O P内からの出土はない。〔46〕はミニチュア土器で、土師質の手捏ネ製品。祭祀用具であろう。

河川 (Fig.5~7・15, PL.6・7・14)

1-O R

B区の西端にて、南北方向に延びる河川跡を確認した。流水のある現水路と重複関係にあり、谷地形を踏襲した前身的な河川である。完全埋没は中世期の水田造成直前であろうが、2-O S付近を肩として西側全域が河川となる。

埋土は、灰色粘土と粗砂・細砂の互層である。最終の河川は、暗灰色シルトを肩にして、調査区端 6m以上・深さ 1m以上が茶灰色細砂・粗砂で洪水層として覆っている(底面は、深度の関係から完掘を断念した)。一時期の石津川河道の可能性がある。上層は 6世紀の堆積であると判断できる。

遺物は、流路を埋めた砂層中より、須恵器坏・他の破片・土師器細片が出土した。

須恵器では、〔81〕坏蓋の小破片。TK47型式。〔82〕坏蓋。復元口径 12.9cm。天井部と口縁部との境界がわずかな稜痕となる。TK10新型式。〔83〕坏身。復元口径 12.6cm。立ち上がりがやや短く、扁平。ヘラケズリは 1/2。TK10新型式。〔84〕坏身破片。復元口径 12.8cm。立ち上がりが短い。TK43型式。〔85〕坏身破片。復元口径 13.8cm。立ち上がりが短く内傾する。生焼けの不良品。TK43型式。〔86〕

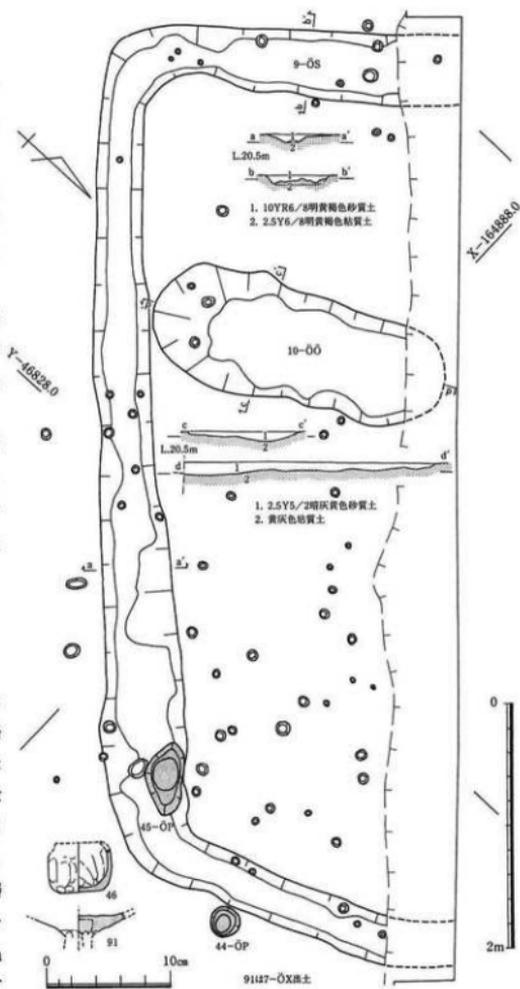


Fig. 12 平地式住居平・断面と出土遺物実測図

内面に同心円文が認められる。高坏型器台体部破片か。

〔87〕土師器高坏脚部～坏底部破片。坏部・脚部の接合は、挿入付加法が観察される。内外面とも風化が著しい。基部復元径2.2cm。

溝 (Fig. 5～7・13～16, PL. 5～7・11～14)

2-O S

B区西端の河川に平行して確認された溝2-O Sは、河道縁辺に巡らされた集落の排水溝で、自然の河川を取り込みながら集落の西縁辺を走行していたと思われる。調査区内で検出した部分は、幅約1.0mでやや蛇行しており、西で急に落ちるのに対し、集落側では段を形成して溝への降り場となっていたようだ。埋土は、人為的に埋め戻されたものようで、上層は橙黄色粘土ブロック混の暗灰色砂土、下層は炭混の灰黒色粘質土であった。

出土遺物は、韓系土器・初期須恵器・埴輪等である。上層は須恵器坏・高坏・土師器があり、下層は埴輪、須恵器坏・高坏・壺・甕、土師器高坏等、比較的多くの出土があった。その破片数の割合は、埴輪1：土師器3：須恵器6であった。埋土と共に投げ込まれた為であろう。

須恵器の〔38〕は完形品の蓋坏の蓋。逆転しながら集落側溝かたにへばりついて出土した。やや小型で口径12.2cm・器高4.8cmを測る。外面には回転ヘラケズリ、口縁部から内面には丁寧なナデが施される。TK47型式。以下は蓋坏身である。〔39〕は口径10.3cm・器高4.6cmを測る。ヘラケズリは2/3。TK47型式。〔40〕復元口径10.3cm・器高4.8cmを測る。ヘラケズリはあまい。MT15型式。〔47〕は坏体部の破片。〔48〕焼き歪の大きい個体、口縁部である。復元口径14.2cm内外・器高5.4cmを測る。ヘラケズリは3/4。TK23型式。〔49〕坏身小破片。〔50〕口縁端部を欠く。小破片。復元口径10.3cm。MT15型式。〔51〕は坏蓋の体部小破片である。「T」字形のヘラ記号を認める。〔41〕体部上部がやや扁平な提瓶である。復元口径7.8cm・復元器高23.8cm。体部外面にはカキ目が、内面には指頭による丁寧な調整の後、ナデが施される。〔56〕提瓶の釣り手部分。41とは異なる個体である。〔52〕子持高坏子坏の体部～口縁部と考えておきたい。復元口径7.5cm。〔53〕短頸壺。半球状の体部に湾曲した口縁部が直立して続く。復元口径8.6cm。丸くおさめられた口縁端部はやや膨らむ。〔54〕甕の口縁部。復元口径8.2cm。外反し、さらに屈曲、外方に伸びる。内部は灰かぶり。〔55〕甕体部。穿孔・6条の波状文が認められる。〔57〕スカシ3方の高坏脚部である。脚復元底径9.2cm。

甕〔58〕〔59〕〔60〕3個体とも口縁部のみの残存である。それぞれ復元口径27.2・26.8・21.8cm。外反する口縁は端部で屈曲し、稜をなしてさらに外反する。内面でもわずかに湾曲する。58・59は、外面セピア色。後者端部は前者より立つ。共に別個体である。〔61〕壺の破片か。外面に細かいハケ。器壁はうすい。〔62〕〔63〕〔64〕すべて甕の体部破片。62は外面に平行斜めタタキ、内面にはナデ・指頭痕が認められる。63は器壁がうすい。外面にはタタキが認められるが、焼けがあまりく、瓦質っぽい。64は外面に格子のタタキ・内面には指頭痕が顕著。〔65〕は壺体部。外面に格子のタタキ・内面には平行同心円状の当て具痕・指頭痕が認められる。〔66〕〔67〕〔68〕〔69〕〔70〕すべて甕破片である。66・70内面は指頭によりナデが施され、外面は灰カブリ。67・69は内面の同心円状当て具の痕跡を丁寧にナデ消している。67外面には自然釉がかかる。68は内外面共ナデにより、丁寧に仕上げられている。69は外面に平行タタキが、内面のあて具痕は丁寧にナデ消されている。

韓系土器の〔71〕長胴甕軟質。外面は麻縄文タタキで、内面は不定方向のヘラケズリ・指頭による調

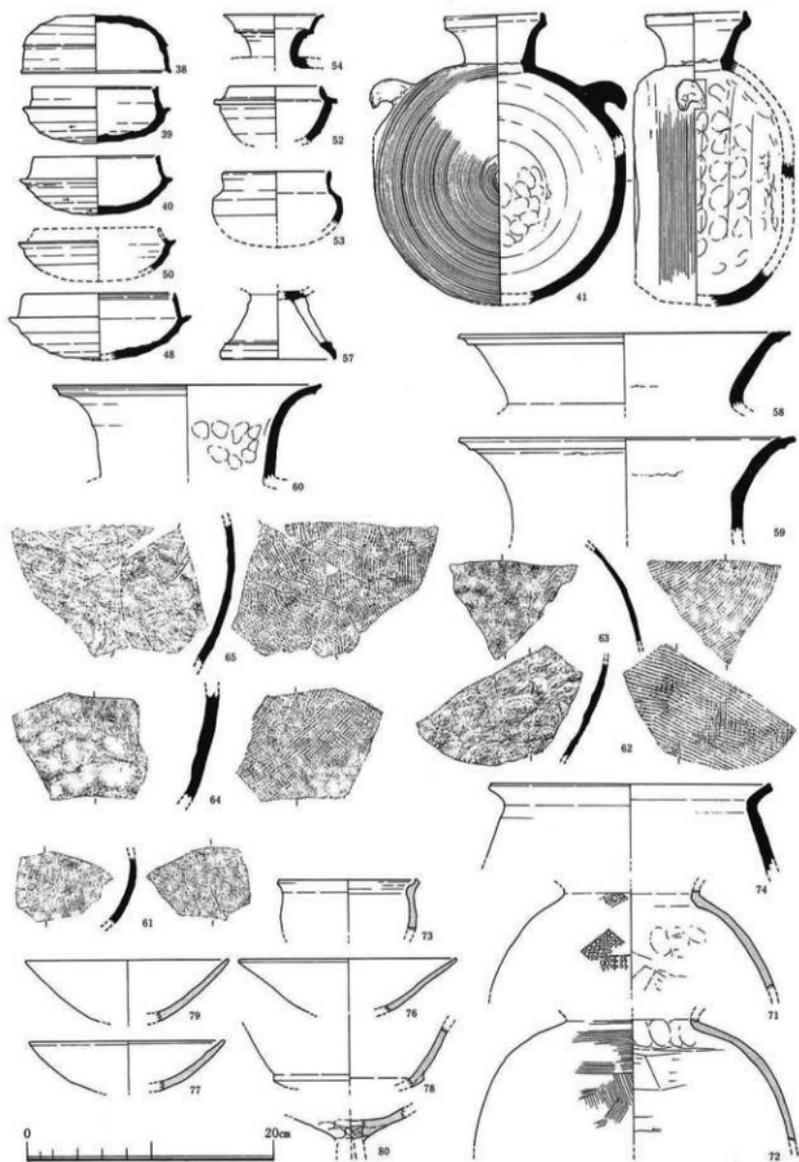


Fig. 13 清2—O S出土遺物実測図

整が施される。〔72〕軟質。外面は斜め方向の後、横方向にハケメを施す。内面は基本的にはヘラケズリ、頸部は指頭で連続的に整える。〔73〕小型平底鉢体部～口縁部破片。軟質。復元口径11.0cm。体部にやや膨らみをもつ。口縁部に最大径をもつと考えられる。内面は黒褐色・外面は赤褐色。粗い砂粒を多く含む。〔74〕赤褐色の甕口縁部破片。硬質。復元口径22.7cm。〔75〕異形須恵器、器財の一部。須恵質。粘土紐卷上げ痕が認められる。上・右側は面取りされる。

土師器として高坏。〔78〕はやや丸みをもつ皿状の坏部から屈曲して斜め外方に伸びる段のつく口縁部分。〔76〕〔77〕〔79〕浅い碗状の坏部分。復元口径16.0cm前後・18.0cm前後。76は薄手。〔80〕脚部～坏底部破片。粘土の緊ぎが断面でよく観察できる。

円筒埴輪〔42〕は、復元上部径29.1cm・下部径16.6cm・器高46.5cm。3条の不整形台形タガ（突帯）が巡るが、残存部分から、最下段に断続ナデ技法が認められる。透かし孔は円形が2個確認できる。外面調整は、タテハケの1次調整のみ。内面は、全面ナデ調整を施した後、口縁部にヨコナデ、底部調整を行う。川西編年V期に位置付けられる普通円筒埴輪。6-OS

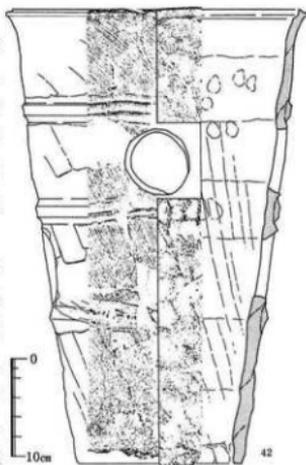


Fig. 14 溝2-OS出土埴輪実測図

B区東端で検出した調査区に直交する6-OSは、幅1.45m・深さ0.2m、断面はゆるやかな「U」字形で、埋土は暗褐色粘質土であった。一種の区画溝的性格があろう。須恵器・土師器（高坏・壺）等多

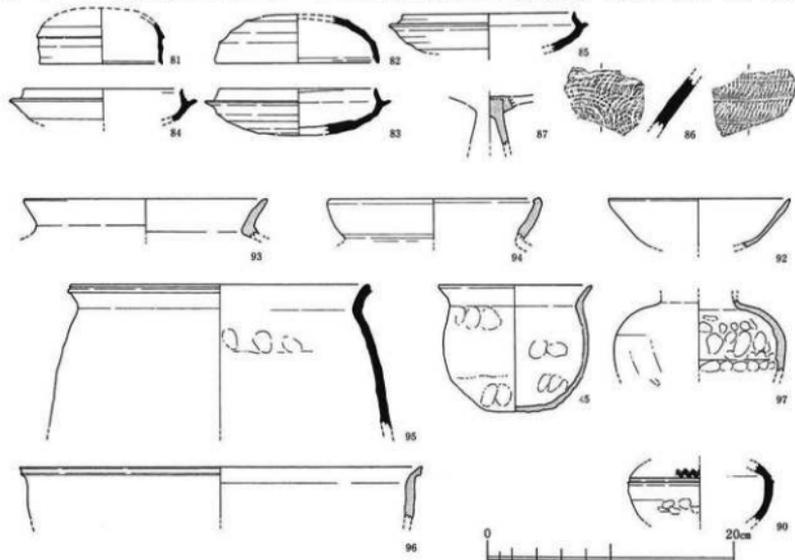


Fig. 15 河川1-OR・溝6-OS出土遺物実測図

くの破片の出土があった。その割合は、破片数で、須恵器1：土師器4である。

[45] は、韓式系土器の影響の土師器小壺。口径12.5cm・器高10.2cmを測る。底部は平らである。内外面ともナデ調整による。外面口縁から体部にかけて黒斑を認める。[90] 須恵器甕体部。復元体部最大径11.8cm。一部波状文7条を認める。上部は灰かぶり。[92] 土師器高坏坏部。復元口径14.8cm。[93] 土師器甕口縁部。復元口径19.6cm。[94] 土師器壺口縁部小破片。復元口径17.0cm。[95] 韓式系土器甕。硬質。復元口径24.6cm。内外面ともナデ調整による。[96] 韓式系土器鉢口縁部小破片。軟質。復元口径32.6cm。風化が激しい。[97] 土師器直口壺体部。体部復元最大径13.8cm。外面はナデ・内面は指頭による調整痕が顕著に認められる。

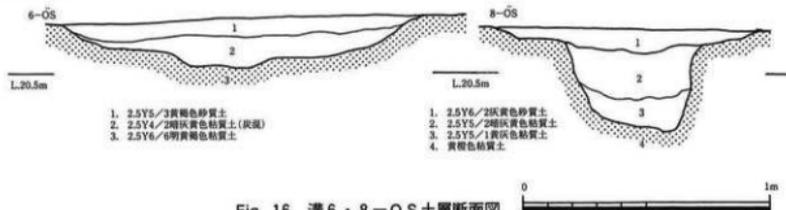


Fig. 16 溝6・8-O S土層断面図

8-O S

B区東寄りで確認した調査区に斜交する8-O Sは、幅1.05mで深さ0.4mと深い。埋土は、上層は灰黄色砂質土・下層は暗灰色粘質土である。比較的しっかりとしたV字溝で、集落の中央を貫いている。須恵器・土師器の細片が出土した。

土坑 (Fig.6・7・17・18, PL.4~6・11・14)

19-O O

A区西辺で検出した。側溝で破壊された為、全容は明らかでない。長辺1.8m以上・短辺0.79m・深さ0.18mを測る、南北方向に長い土坑である。埋土は、暗灰色砂質土であった。遺物は特に出土しなかった。

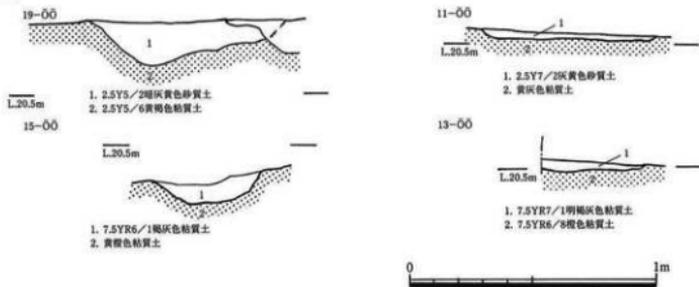


Fig. 17 土坑19・11・13・15-O O土層断面図

10-O O

B区東寄りで検出した南北方向に長い土坑。長辺2.4m以上・短辺0.92m・深さ0.1mを測る。埋土は、灰黄色砂質土の単一層で、遺物は須恵器・土師器の小破片11点が出土した。

11-00

B区東寄り平地式住居南辺で検出した長辺1.08m・短辺0.71m・深さ0.035mを測る土坑。埋土は、灰黄色砂質土からなる。遺物は須恵器コップ形土器把手部の破片と須恵器・土師器の細片が出土した。

12-00

B区中央部で検出した浅い土坑。大半が工事時に破壊されている為、全容は不明。0.68m以上×0.42m以上・深さ0.16m、埋土は黄褐色粘質土。遺物は土師器の破片が出土したのみ。

13-00

B区中央部で検出した浅い土坑。破壊の為、全容は不明。遺物は土師器の細片が出土したのみ。

15-00

B区西辺で検出した楕円形を呈する土坑。16-0Dに隣接しており、関連するのだろうか。長辺1.86m・短辺0.45m・深さ0.15m、埋土は褐色粘質土である。口縁部が欠失した須恵器蓋坏坏身・坏蓋が検出された。その他に、有蓋高坏等須恵器破片と共に、土師器細破片が出土した。

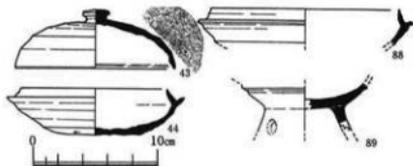


Fig. 18 土坑15-00出土遺物実測図

主な遺物は、[43] 須恵器有蓋高坏蓋。天井部には重焼きの痕跡があり、ツマミの下にジグザグのヘラ記号をもつ。TK43型式。[44] 須恵器坏身。底部ヘラ起こして、底のみ回転ヘラケズリ。焼成時にひびが入っている不良品。TK10新形式。[88] 3-OW出土破片と接合した須恵器坏身。焼き上がりがあまく、大きく歪む。[89] 須恵器有蓋高坏の坏~脚部破片。復元頸部径6.4cm。脚部に円形のスカシガ認められる。TK10型式。

落込み (Fig.7・12、PL.5・14)

7-0X

平地式住居・掘立柱建物の検出を見た地点に平面形は隅丸方形を呈していた為、住居跡ではないかと精査・立割を行ったが、積極性に欠けた浅い落ち込みとして確認された。後世の攪乱・削平を受けた為に深さ0.1~0.08mと浅いものとなっている。埋土は、概ね灰黄色粘質土であった。遺構からは、須恵器破片・土師器の高坏等の細片が比較的多く出土した。[91]は、土師質高坏の坏部片である。坏部・脚部の接合技法は、坏部を脚部に付加する挿入付加法による。

第3節 その他の時代の遺構と遺物

2層より掘りこまれたと思われる中世期の遺構を同一面の第I面で検出した。また、I面では、中世期かと思われる耕作に伴った杭穴を多数検出した。杭穴は、A区北半からB区にかけて検出されたが、埋土は褐色土を基本とし、近世以降、現代までの杭穴埋土と異なっており、古墳期の遺構と関連すると考えられるもの以外は、古墳期とするには積極性に欠け、中世期の耕作に伴う所産と結論付けておきたい。また、浅いピット46・47-OPも耕作に伴ったピットの可能性がある。

井戸 (Fig.7、PL.6・7)

3・4-OW

いずれも中世後期の耕作に伴った素掘りに比定される井戸である。3-OWは、長径1.15m・短径0.9

m・深さ0.75mを測る。埋土は黄橙色混じりの灰白色粘質土と一様ではない。4-OWは、長径0.8m・短径0.78mと3-OWより一回り小さいが、深さは0.95m以上を測る。埋土は明黄褐色砂質土。一連をなす水溜め井戸と考えられ、共に、古墳期面を削平して造成した2層の水田畑用井戸で、3-OWは水溜め、4-OWは素掘りの水汲み井戸として使用されたと考えられる。4-OWからは、古墳期の須恵器と共に瓦質鉢などの瓦質土器片が出土した。3-OWからは、古墳期須恵器・土師器とともに中世土師器(カワラケ)の破片が検出された。

第Ⅱ面は、3層を除去した4層上面にて、自然の氾濫による洪水面を調査した。溝状の流路4条が検出された。埋土は、何れも粗砂～細砂である。調査区内では、A区西部分の標高は、T.P.17.55mを頂点として、東西方向へと高度を減じ、その比高差は0.6mであった。

以下、自然地形と土層の観察は、筋掘り・断ち割りトレンチで行い、縄紋晩期面まで確認した(概略は第1節 層序と概要の項に記したので省略)。結果、流路と思われる2条の河川の落ちを確認した。

自然流路 (Fig.6・7, PL.8・10)

総て、自然流路の痕跡である。

48-O R

A区東辺で確認された、幅3.0m以上・深さ0.1mを測る流路の跡。埋土はラミナの混じる灰白色細砂土であった。南北方向に走行している。弥生期かと思われる。

49-O R

A区東側で確認の幅6.0m以上・深さ0.2mを測る流路の跡。埋土は粘土混じりの微砂。弥生期かと思われる。48-O Rと同様、南北方向から南西にかけても走行していたと考えられ、かなりの流れだったことが見て取れる。

50-O R

B区中央部で確認された幅7.0m以上・深さ0.18mを測る流路である。埋土は明黄褐色微砂～細砂土。流路中央部の流れとして、溝状にえぐれている走行は、全体を覆いながら南北方向に流れた痕跡である。弥生期かと判断される。

51-O R

B区中央部の50-O Rの西で、幅9.0m・深さ0.18mを測る流路が確認された。埋土は、灰色細砂土で、50-O Rとは別物の流れである。やはり、流水の中央部が溝状にえぐられ、南北方向の走行を示す。

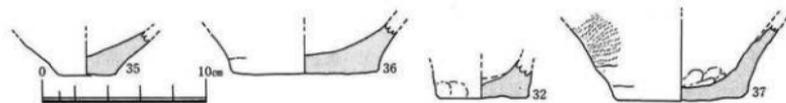


Fig. 19 包含層出土弥生土器実測図

52・53-O R

52-O Rは、中央部南壁断面で、5層を切って幅4.0m以上・深さ0.5m以上を測る落ちとして確認。埋土は灰白粗砂混じりの灰白色細砂。青灰色シルトの5層を切っており、縄紋晩期かと判断された。

B区北辺で確認した53-O Rの落ちは、幅9.6m・深さ0.4m以上を測る。埋土は暗灰色粘質土混じりの細砂。同様に、5層の青灰色シルト面の縄紋晩期層を切っている。

第四章 結 章

今回の調査は、長いトレンチ調査的な狭小調査区を対象としたが、過去の調査成果を追認すると共に、多くの遺構を確認することができたのが大きな成果であった。

以下、古墳時代集落についての所見と周知の遺跡・小阪遺跡について、概観して章を閉じる。

第1節 古墳時代集落の構造 (PLAN.3~5)

古墳時代中期の集落として著名な小阪遺跡は、石津川と陶器川との合流点付近から原池にかけて広がる縄紋時代から中世に至る遺跡である。近畿自動車道と歌山線並びに府道松原東大津線（現泉北北線・主要地方道泉大津美原線）建設に伴い遺跡北東部から南西部にかけて縦断する形で発掘調査が実施されている。

中でも、伏尾段丘面より舌状に伸び周囲を自然河川と谷地形により分断された狭い尾根状地形の突端部、南北60m・東西80m前後の範囲、石津川と陶器川両河川との氾濫原に挟まれた自然堤防化した微高地上T.P.±20.8~20.0m前後のC地区調査区で、集落が検出されている。初期須恵器を含む遺物とともに、堅穴住居7棟、掘立柱式の建物5棟（倉庫と考えられている2間×2間の総柱建物3棟・他建物2棟）、土坑・落込み30基と多数の溝・ピットといった古墳時代中期の遺構で構成される集落跡と認識されている。今回、新たに堅穴住居1棟、平地式住居1棟、掘立柱建物3棟以上（8棟を認識）を加えた。住居は屋・倉庫がいくつかまとまり、小グループで構成されることがわかる。

出土遺物は、概して量は多くないが、定形化する以前のタイプの須恵器を含み、土師質の小形鉢・瓶などの韓式系土器をも伴う点等も注目される。土坑や落込みからは、須恵器あて具（内面整形道具）や破損品・溶着・焼け歪のある須恵器不良品が多く出土し、土師器も須恵器の量と同じ分量出土したと報告されている。

このような遺物の特質・出土状況等を、小阪遺跡検出集落の状況—TK73・TK85といった「陶邑」における最古式に属する窯が分布する高蔵（TK）地区北端部の石津川・陶器川合流地点という交通の要所に、短期間営まれた小規模な集落である—と併せ見ると、小阪遺跡集落には初現的須恵器陶工集団の集落としての性格を十分に想定し得るものと考えられる。

既に指摘されているよう、調査区近隣域で検出される集落は、その性格から、陶邑古窯址群（阪南古窯跡群）初現期に、短い期間営まれた、比較的小規模な須恵器工人集団の集落と想定できよう。古代の大窯業地「陶邑」の地は、茅渚海と呼ばれた大阪湾の「石津」海岸側の入口部にあたり、まさに河川交通の要の地に集落は営まれている。

また、南側の丘陵上に位置する田辺編年TK216~208型式期の掘立柱建物群を主体に構成される伏尾集落では、下池・上池の開折谷を挟んだ地域（小代古墳群）を墓域としたと考えられ、家形・鳥形の形象埴輪をはじめ普通円筒埴輪の樹立されている5世紀代の径15m前後の古墳や、2次調整B種ヨコハケで有黒斑の川西編年Ⅲ期の埴輪を伴う径30mを測る古墳等10基が確認されている。今回、小阪遺跡の溝2-O Sから出土したV期の普通円筒埴輪は何を語るのであろうか。今後、興味深い事柄が判明するかもしれない。

これら二つの集落の関係は、密接な関係にあったと思われ、集落の動向も無関係ではあり得ないであ

ろう。岡戸哲紀氏が発言しているように、陶邑の須恵器生産集団に関して、「須恵器生産の核となる大規模な集落と、須恵器生産の一部を分担する小規模集落など多種・多様な性格を持った集落で構成されていた」と考えられるが、それぞれの間には、集落の階層差、言い替えば、直接的な支配・被支配の関係も想定される。また、不安定な氾濫原立地の小規模集落から、丘陵台地部の整然と計画された広範囲大規模な集落へ移行するとも考えられるが、同時存在している時期の遺構も認められる。

第2節 小阪遺跡の概観 (PLAN.3, PL.1・2)

周知の遺跡内の小阪遺跡では、旧石器時代から近世期にかけての多種多様の遺物が検出されている。特に縄紋時代の遺物と古墳期の初期須恵器に関しては、豊富な資料が出土し、注目に値する。時代ごとに概要を記す。もちろん出土遺物は遺構が確認される周辺の遺跡とは無関係ではなく、それらと一体とした空間を形成し、遺跡総体として検討を加えなければならないことは言うまでもないことである。周知の遺跡内での情報として提示する。

〔旧石器時代〕

K13地区以東で国府型ナイフ形石器を中心に各種のナイフ形石器が後世の包含層・遺構から出土している。新しい時期の土層中に混入して出土する傾向が強い。

〔縄紋時代〕

前期：K10地区より羽状縄紋を持つ北白川下層式の土器片が出土している。この他、K15地区より前期末の大蔵山式ないしは中期初頭の鷹島式土器が検出されている。

中期：K21・K14・K15・K20地区より中期初頭の船元式土器が出土している。中期末から後期初頭では、K14地区以東の自然流路から北白川C式・馬場川O式を中心とした豊富な資料が検出されている。遺構としては、K20地区で、土坑・土器片を円形に敷き並べた遺構が確認される。

後期：K10地区を中心とした地域で、後期初頭の中津式土器が出土し、元住吉山式土器、K14地区より宮滝式土器が出土している。

晩期：滋賀里Ⅱ・Ⅲb・Ⅳ式土器がK21・H22地区より、晩期末の船橋式・長原式土器が各調査区より出土している。K21地区では土坑並びに各調査区中最多の遺物が検出されている。K15地区では晩期末の遺物とともに関東・甲信越地方と関係の深い浮線文が施された浅鉢片が確認される。

〔弥生時代〕

前期：K21・K17・K13・K15・K20地区より土器片が出土している。縄紋時代晩期の土器と共に出土しているものには、段がつくものや、木葉文を施すものなど、前期の中でも古い要素を持つものが多い。これに続く多条沈線が施された新段階の土器片もK21・K13地区より少量検出されている。

中期：L1・K20地区より中期後半の土器片が出土している。

後期：後期から庄内式期にかけての遺物が出土しているが、庄内期と明確に分離できない様である。

〔古墳時代〕

前期：K14地区以東の各調査区より、遺構は検出されていないが、自然流路内から多量の遺物が検出されている。これらは、河内地域の典型的な庄内式土器を含むが、その大多数は弥生時代後期の特徴を備えたいわゆる伝統的V様式の土器群である。つづく布留式の時期も、K14地区以東の各調査区より土器が検出されている。

中期：初期須恵器が生産されていた時期には、K17地区に竪穴住居・掘立柱建物・平地式住居で構成さ

れた集落が形成される。この集落は旧石津川の形成した自然堤防上に立地するもので、初期須恵器・韓式系土器などが大量に出土している。我が国に須恵器製作技法が伝播して間もない頃、これらの生産に深く係わった集団の集落であったと考えられる。また、この集落の脇を流れる自然流路からは、臼・梯子などの木製品が大量の土器と共に検出されており、須恵器生産ばかりを専門的に行った集団とは言いがたい状況である。つづく中期後半には、H21・H22地区で窯跡に伴う灰原が検出され、多量の須恵器が出土している。この中には、二重甕・鳥形甕など特殊な須恵器も含まれている。

後期：各調査地点より須恵器が出土しているが、遺構に伴った形で検出されたものはない。この他、H21・H22地区では灰原の下より時期の明確でない水田が検出されている。

〔古代〕

各調査区より遺物は出土しているが、明確な遺構は小規模な掘立柱建物や、しがらみが検出されているのみで、水とのかかわりが強い時期といえる。奈良時代では、L1地区内より甕に墨で人の顔を描いた人面墨描土器が出土し、和泉国で人面墨描土器が出土している遺跡では、最も南に位置している。この他、土馬が検出されており、K20地区では平安時代前期と考えられるミニチュア土器が出土している。小阪遺跡周辺で、祭祀がとり行われていた状況が推定される。この他、奈良・平安時代の土器が各地点で少量出土し、K22・K10地区からは、墨書土器が出土している。また、L1地区より神功開寶（765年初鑄）、K15地区より延喜通寶（907年初鑄）が出土し、K17・K10・K15地区からは小規模な掘立柱建物が検出されている。平安時代後期に比定される軒瓦もK21・K17地区より検出されることから、平安時代の終わり頃には遺跡周辺に小規模な堂的な建物が存在していた可能性がある。

〔中世〕

小阪遺跡付近一体が耕作地開墾された時期である。地点によっては、時期差がある様であるが、耕地化は中世でも瓦質土器の時期に下がるようである。現在付近一帯に遺存する条里型地割とほぼ同一方向を持つ耕作溝が各調査区で検出されている。この時期の建物・井戸跡などは現在までの発掘調査では検出されておらず、当時のムラはやや離れた位置（平井遺跡）に営まれ、調査区周辺は水田・畑地として利用されていたと考えられる。

〔近世〕

前時代と同様、遺跡付近一帯が水田として利用されていた時期にあたる。集落は、明治期の仮製地図に見る旧自然村落であり、その生産地として利用されている。遺跡の中央を流れる陶器川も、現在見られる位置とほぼ同様の位置に固定され、堤防が構築される。

Tab. 1 検出遺構一覧(遺構台帳)

遺構 No	遺構の 種類	地区別	遺構面	平面形	法 量			覆土(色・質)	時期	備 考
					長径(m)	短径(m)	深さ(m)			
1	OR	K22R1 R1 FJ	I面	-	6.40以上	-	1.00以上	25Y7/1灰白色粗砂 ~10YR5/8黄褐色粗砂	5C	河川
2	OS	K22D1 DK EJ EK	I面	-	2.20以上	3.55以上	0.88	上層:10YR4/1褐灰色粘土プロッ ク凝じりの砂土 下層:10YR3/1黒褐色粘質土	5~6C	集落区画溝
3	OW	K22CM	I面	楕円形	1.15	0.9	0.75	黄褐色凝じりの灰白色粘質土	中世	
4	OW	K22CM	I面	円形	0.8	0.78	0.95以上	10YR7/6明黄褐色砂質土	中世	
5	OS	K22CL CM DL	I面	-	6.20以上	0.37	0.11	75YR6/1褐灰色粘質土	古墳	竪穴住居より 延びるU字溝
6	OS	K17UT UU	I面	-	4.56以上	1.49	0.205	上層:25Y5/3黄褐色砂質土 下層:25Y4/2暗灰黄色粘質土	5C	区画溝
7	OX	K17US UT	I面	隅丸 方形	2.7	1.91以上	0.08	25Y7/4浅灰色砂質土	5C	
8	OS	K17UT VT	I面	-	3.40以上	1.065	0.43	上層:25Y6/2灰黄色砂質土 中層:25Y5/2暗灰黄色粘質土 下層:25YR5/1黄灰色粘質土	5C	板敷岸を伴う溝か
9	OS	K17WQ WR WS VS	I面	コの 字形	南北2.587以上 東西6.7%以上	南北0.57 東西0.53	南北0.075 東西0.075	南北:25Y7/6明黄褐色砂質土 東西:10YR6/8明黄褐色砂質土	5C	平地式住居の周溝
10	OO	K17VR WR	I面	楕円形	2.40以上	0.92	0.1	25Y6/2灰黄色砂質土	古墳	
11	OO	K17WR WS	I面	楕円形	1.08	0.71	0.035	25Y7/2灰黄色砂質土	古墳	
12	OO	K17XP YP	I面	楕円形	0.68以上	0.42以上	0.16	75YR7/1明褐色粘質土	古墳	大半が破壊
13	OO	K17YO	I面	楕円形	0.84	0.42以上	0.05	75YR7/1明褐色粘質土	古墳	浅いPit
14	OP	K17TU TV	I面	円形	0.33	-	0.41	掘方:10YR6/8明黄褐色粘土 柱痕:10YR4/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径14cm
15	OO	K22BM CM	I面	楕円形	1.86	0.45	0.15	75YR6/1褐灰色粘質土	古墳	完形坏出土
16	OD	K22CL CM	I面	方形	2.85以上	1.40以上	0.16	上層:10YR6/2灰黄色粘質土 中層:10YR6/6明黄褐色粘土 下層:10YR4/2灰黄色粘質土	古墳	焼失竪穴住居
17	OP	K22CL	I面	円形	0.23	-	0.405	黒褐色凝じりの黄灰色粘質土	古墳	竪穴住居柱穴
18	OP	K17SV	I面	楕円形	0.39	-	0.345	掘方:10YR6/6明黄褐色粘質土 柱痕:10YR4/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径17cm
19	OO	K17TU	I面	隅丸 長方形	1.80以上	0.79	0.18	25Y5/2暗灰黄色砂質土	古墳	
20	OP	K17YQ	I面	円形	0.26	-	0.435	掘方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径17cm
21	OP	K17YQ	I面	円形	0.3	-	0.34	掘方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径11cm
22	OP	K22BO	I面	円形	0.24	-	0.28	掘方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR4/2灰黄色粘質土	古墳	柱痕の径13cm
23	OP	K17YP	I面	円形	0.3	-	0.46	掘方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR6/2灰黄色粘質土	古墳	柱痕の径16cm
24	OP	K22AP	I面	円形	0.2	-	0.16	掘方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/2灰黄色粘質土	古墳	建物柱穴ではない 柱痕の径12cm
25	OP	K22AO	I面	楕円形	0.32	-	0.2	10YR7/8黄褐色粘質土	古墳?	柱穴ではない 浅い皿状Pit
26	OP	K22YO AO	I面	楕円形	0.345	-	0.1	10YR5/2灰黄色粘質土	古墳?	柱穴ではない 浅い皿状Pit
27	OP	K22AO	I面	円形	0.23	-	0.235	掘方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/2灰黄色粘質土	古墳	

遺構 No.	遺構の 種類	地区割	遺構面	平面形	法 量			覆土(色・質)	時期	備 考
					長径(m)	短径(m)	深さ(m)			
28	OP	K22AO	I面	円形	0.37	-	0.33	層方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/2灰黄色粘質土	古墳	柱痕の径15cm
29	OP	K17YO	I面	円形	0.31	-	0.1	層方:10YR6/1褐灰色粘質土	古墳	浅い、柱痕なし
30	OP	K17RV	I面	円形	0.4	-	0.06以上	黄褐色粘質土	古墳	一部残っているのみ 大半が破壊
31	OP	K17SW	I面	円形	0.4	-	0.335	層方:2.5Y6/1黄灰色粘質土 柱痕:10YR4/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径11cm
32	OP	K17SW	I面	楕円形	0.42	-	0.305	層方:10YR6/6明黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径12cm
33	OP	K17SW	I面	円形	0.4	-	0.245	層方:10YR6/8明黄褐色粘質土 柱痕:10YR4/1褐灰色粘質土	古墳	柱痕の径15cm
34	OP	K17SV TV	I面	円形	0.365	-	0.38	層方:10YR6/8明黄褐色粘質土 柱痕:10YR3/1黒褐色粘質土	古墳	柱痕の径15cm
35	OP	K17SV	I面	楕円形	0.39	-	0.49	層方:10YR4/1褐灰色粘質土 柱痕:10YR7/3 にぶい黄褐色粘質土	古墳	柱痕の径15cm
36	OP	K17SV	I面	円形	0.37以上	-	不明	黄褐色粘質土	古墳	一部残っているのみ 大半が破壊
37	OP	K17SV	I面	円形	0.35	-	0.18	黄褐色粘質土	古墳	柱穴ではない 浅いPit
38	OP	K17TU	I面	楕円形	0.39	-	0.09	10YR6/4にぶい黄褐色粘質土	古墳	柱穴ではない
39	OP	K17TU	I面	円形	0.31	-	0.4	層方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:2.5YR3/1暗赤灰色粘質土	古墳	柱痕の径19~15cm
40	OP (柱穴)	K22CL	I面	円形	0.38	-	0.73	層方:2.5Y7/6明黄褐色粘質土 柱痕:2.5Y6/1黄灰色粘質土	古墳	柱痕の径23cm 竪穴住居16-ODとの 吻合新し
41	OP (柱穴)	K22CL	I面	円形	0.28	-	0.465	層方:10YR7/8黄褐色粘質土 柱痕:10YR6/2灰黄色粘質土	古墳	柱痕の径17cm
42	OP	K22DL	I面	円形	0.3	-	0.44	層方:10YR7/1灰白色粘質土 柱痕:10YR6/2灰黄色粘質土	古墳	柱痕の径17cm
43	OP	K22DL	I面	楕円形	0.3	-	0.24	層方:10YR7/6明黄褐色粘質土 柱痕:10YR5/2灰黄色粘質土	古墳	柱痕の径17cm 5-OSとの切合あり
44	OP	K17VS	I面	円形	0.25	-	0.25	層方:黄灰色粘質土 柱痕:黄褐色粘質土	古墳	溝9-OS内 平地式住居径15cm 柱痕あり
45	OP	K17VS	I面	楕円形	0.6	-	0.3	層方:黄灰色粘質土 柱痕:黄褐色粘質土	古墳	溝9-OS内 平地式住居 径25cmの柱痕
46	OP	K22BM	I面	楕円形	0.57	0.35	0.06	黄灰色砂質土	中世?	柱穴ではない 浅いPit
47	OP	K22BM	I面	円形	0.5	0.47	0.09	黄灰色砂質土	中世?	柱穴ではない 浅いPit
48	OR	K18MC NC NB	II面	-	-	3.00以上	0.10以上	2.5Y8/1灰白色細砂土	弥生?	自然流路
49	OR	K18OA~ K17UT	II面	-	-	6.00以上	0.20以上	7.5Y6/1灰色粘土混じり微砂層	弥生?	自然流路
50	OR	K17WR XV XQ	II面	-	-	7.00以上	0.18以上	2.5Y6/6明黄褐色微砂~細砂土	弥生?	自然流路
51	OR	K17YP AP VO AO	II面	-	-	9.00	0.18以上	5Y6/1 灰色細砂土	弥生?	自然流路
52	OR	K17QY RV RX	III面	-	-	4.00以上	0.50以上	灰色粗砂混じり 灰白色細砂	縄紋 晩?	自然流路
53	OR	K17UU~ WS	III面	-	-	9.6	0.40以上	暗灰色粘質土混じりの細砂層	縄紋 晩?	自然流路

類													出土年月日	備 考 (韓式系土器は小破片の為、硬質は須恵器に軟質は土師器に含めている。○印は器種の破片を含むことを意味する。)					
(中世) 土師器			(中世) 須恵器			瓦 質			国産陶磁器		輸入陶磁器								
羽 蓋 埴 輪	甕	鉢	皿	その他	甕	鉢	その他	羽 蓋	甕	鉢	その他	染 付	その他	白 磁	青 磁	染 付	その他		
		1		3								1						000620	
1																		000622	軟質含
																		000623	硬質含
1														1				000703	
				16								2	5					000703	布目瓦 1・染付け:19C
														1				000704	軟質 1
				2	1		5	3	2	4					1			000704	15C
1				51	1	1	1	1		5	52							000705	15C
				5			6											000705	
2	2		2	14			3					9						000706	布目瓦 1:15C
				3														000706	施 生焼けのある平瓶
																		000707	提瓶 1・土師質埴輪 1
																		000707	
																		000707	施・硬質
				2														000707	生焼け 1有り:15C
				11		1												000707	施 1
											1	1						000707	施 1・軟質含
																		000707	15C
								1										000710	軟質含・瓦器は混入
																		000710	初期須恵器・施含む
																		000710	
																		000710	
				3														000711	5C後半
																		000717	軟質
																		000717	5C後半 短頸壺 1
																		000717	壺・鉢・土師・韓式系長胴壺・軟質
																		000717	手捏ネ碗
																		000717	初期須恵器
																		000717	初期須恵器 コップ把手
																		000717	5C
																		000717	5C
																		000717	木炭片
																		000717	初期須恵器
																		000717	韓式系
																		000717	5C
																		000717	5C初期須恵器
																		000717	韓式系
																		000717	
																		000718	有黒斑同一壺破片
																		000718	短頸壺
																		000718	施
																		000721	生焼け
																		000721	
																		000721	
																		000721	木炭片
																		000726	柱根木材
																		000726	軟質含
																		000727	底部2
																		000731	底部
																		000801	弥生中期

Tab. 3 作成図面一覧 (図面台帳)

図面No.	地区	連携種別	連携名・内容	図枚数	図尺	実施日	図章費対照
1	A	—	府界土層断面図 (1)	2/2	1/20	000707	Fig. 9
2	A	—	府界土層断面図 (2)	2/2	1/20	000708	—
3	A	—	府界土層断面図 (3)	2/2	1/20	000709	—
4	A	—	府界土層断面図 (4)	2/2	1/20	000720	—
5	B	—	府界土層断面図 (5)	2/2	1/20	000721	—
6	B	—	府界土層断面図 (6)	2/2	1/20	000722	Fig. 5・6
7	B	—	府界土層断面図 (7)	2/2	1/20	000724	Fig. 5・6
8	B	1層	北麓部分土層断面図 溝1-8-9-O8-11-19-11-O2断面図	1/2	1/10	000718	Fig. 12-12-17
9	B	—	溝1-9-15-O3-27-28-C9-溝1-C9断面図	1/2	1/20	000719	Fig. 9-11-17
10	B	—	溝2断面図 (1)	3/2	1/20	000727	—
11	A	—	溝2断面図 (2)	4/2	1/10	000728	Fig. 6
12	B	1層	溝1-11-12-20-C9-溝1-C9断面図	1/2	1/20	000809	Fig. 7
13	A	1層	溝1-13-31-32-33-34-35-37-38-39-C9断面図	4/2	1/10	000727	Fig. 6
14	A	1層	溝1-14-15-16-17-18-19-20-C9断面図	1/2	1/20	000728	Fig. 7
15	B	—	溝1-15-16-17-18-19-20-C9断面図	1/2	1/20	000729	—
16	B	—	溝1-16-17-18-19-20-C9断面図	1/2	1/20	000730	—
17	B	—	溝1-17-18-19-20-C9断面図	1/2	1/20	000731	—
18	B	—	溝1-18-19-20-C9断面図	1/2	1/20	000732	—
19	B	—	溝1-19-20-C9断面図	1/2	1/20	000733	—
20	B	—	溝1-20-C9断面図	1/2	1/20	000734	—
21	B	—	溝1-21-C9断面図	1/2	1/20	000735	—
22	B	—	溝1-22-C9断面図	1/2	1/20	000736	—
23	B	—	溝1-23-C9断面図	1/2	1/20	000737	—
24	B	—	溝1-24-C9断面図	1/2	1/20	000738	—
25	B	—	溝1-25-C9断面図	1/2	1/20	000739	—
26	B	—	溝1-26-C9断面図	1/2	1/20	000740	—
27	B	—	溝1-27-C9断面図	1/2	1/20	000741	—
28	B	—	溝1-28-C9断面図	1/2	1/20	000742	—
29	B	—	溝1-29-C9断面図	1/2	1/20	000743	—
30	B	—	溝1-30-C9断面図	1/2	1/20	000744	—
31	B	—	溝1-31-C9断面図	1/2	1/20	000745	—
32	B	—	溝1-32-C9断面図	1/2	1/20	000746	—
33	B	—	溝1-33-C9断面図	1/2	1/20	000747	—
34	B	—	溝1-34-C9断面図	1/2	1/20	000748	—
35	B	—	溝1-35-C9断面図	1/2	1/20	000749	—
36	B	—	溝1-36-C9断面図	1/2	1/20	000750	—
37	B	—	溝1-37-C9断面図	1/2	1/20	000751	—
38	B	—	溝1-38-C9断面図	1/2	1/20	000752	—
39	B	—	溝1-39-C9断面図	1/2	1/20	000753	—
40	B	—	溝1-40-C9断面図	1/2	1/20	000754	—
41	B	—	溝1-41-C9断面図	1/2	1/20	000755	—
42	B	—	溝1-42-C9断面図	1/2	1/20	000756	—
43	B	—	溝1-43-C9断面図	1/2	1/20	000757	—
44	B	—	溝1-44-C9断面図	1/2	1/20	000758	—
45	B	—	溝1-45-C9断面図	1/2	1/20	000759	—
46	B	—	溝1-46-C9断面図	1/2	1/20	000760	—
47	B	—	溝1-47-C9断面図	1/2	1/20	000761	—
48	B	—	溝1-48-C9断面図	1/2	1/20	000762	—
49	B	—	溝1-49-C9断面図	1/2	1/20	000763	—
50	B	—	溝1-50-C9断面図	1/2	1/20	000764	—
51	B	—	溝1-51-C9断面図	1/2	1/20	000765	—
52	B	—	溝1-52-C9断面図	1/2	1/20	000766	—
53	B	—	溝1-53-C9断面図	1/2	1/20	000767	—
54	B	—	溝1-54-C9断面図	1/2	1/20	000768	—
55	B	—	溝1-55-C9断面図	1/2	1/20	000769	—
56	B	—	溝1-56-C9断面図	1/2	1/20	000770	—
57	B	—	溝1-57-C9断面図	1/2	1/20	000771	—
58	B	—	溝1-58-C9断面図	1/2	1/20	000772	—
59	B	—	溝1-59-C9断面図	1/2	1/20	000773	—
60	B	—	溝1-60-C9断面図	1/2	1/20	000774	—
61	B	—	溝1-61-C9断面図	1/2	1/20	000775	—
62	B	—	溝1-62-C9断面図	1/2	1/20	000776	—
63	B	—	溝1-63-C9断面図	1/2	1/20	000777	—
64	B	—	溝1-64-C9断面図	1/2	1/20	000778	—
65	B	—	溝1-65-C9断面図	1/2	1/20	000779	—
66	B	—	溝1-66-C9断面図	1/2	1/20	000780	—
67	B	—	溝1-67-C9断面図	1/2	1/20	000781	—
68	B	—	溝1-68-C9断面図	1/2	1/20	000782	—
69	B	—	溝1-69-C9断面図	1/2	1/20	000783	—
70	B	—	溝1-70-C9断面図	1/2	1/20	000784	—
71	B	—	溝1-71-C9断面図	1/2	1/20	000785	—
72	B	—	溝1-72-C9断面図	1/2	1/20	000786	—
73	B	—	溝1-73-C9断面図	1/2	1/20	000787	—
74	B	—	溝1-74-C9断面図	1/2	1/20	000788	—
75	B	—	溝1-75-C9断面図	1/2	1/20	000789	—
76	B	—	溝1-76-C9断面図	1/2	1/20	000790	—
77	B	—	溝1-77-C9断面図	1/2	1/20	000791	—
78	B	—	溝1-78-C9断面図	1/2	1/20	000792	—
79	B	—	溝1-79-C9断面図	1/2	1/20	000793	—
80	B	—	溝1-80-C9断面図	1/2	1/20	000794	—
81	B	—	溝1-81-C9断面図	1/2	1/20	000795	—
82	B	—	溝1-82-C9断面図	1/2	1/20	000796	—
83	B	—	溝1-83-C9断面図	1/2	1/20	000797	—
84	B	—	溝1-84-C9断面図	1/2	1/20	000798	—
85	B	—	溝1-85-C9断面図	1/2	1/20	000799	—
86	B	—	溝1-86-C9断面図	1/2	1/20	000800	—
87	B	—	溝1-87-C9断面図	1/2	1/20	000801	—
88	B	—	溝1-88-C9断面図	1/2	1/20	000802	—
89	B	—	溝1-89-C9断面図	1/2	1/20	000803	—
90	B	—	溝1-90-C9断面図	1/2	1/20	000804	—
91	B	—	溝1-91-C9断面図	1/2	1/20	000805	—
92	B	—	溝1-92-C9断面図	1/2	1/20	000806	—
93	B	—	溝1-93-C9断面図	1/2	1/20	000807	—
94	B	—	溝1-94-C9断面図	1/2	1/20	000808	—
95	B	—	溝1-95-C9断面図	1/2	1/20	000809	—
96	B	—	溝1-96-C9断面図	1/2	1/20	000810	—
97	B	—	溝1-97-C9断面図	1/2	1/20	000811	—
98	B	—	溝1-98-C9断面図	1/2	1/20	000812	—
99	B	—	溝1-99-C9断面図	1/2	1/20	000813	—
100	B	—	溝1-100-C9断面図	1/2	1/20	000814	—
101	B	—	溝1-101-C9断面図	1/2	1/20	000815	—
102	B	—	溝1-102-C9断面図	1/2	1/20	000816	—
103	B	—	溝1-103-C9断面図	1/2	1/20	000817	—
104	B	—	溝1-104-C9断面図	1/2	1/20	000818	—
105	B	—	溝1-105-C9断面図	1/2	1/20	000819	—
106	B	—	溝1-106-C9断面図	1/2	1/20	000820	—
107	B	—	溝1-107-C9断面図	1/2	1/20	000821	—
108	B	—	溝1-108-C9断面図	1/2	1/20	000822	—
109	B	—	溝1-109-C9断面図	1/2	1/20	000823	—
110	B	—	溝1-110-C9断面図	1/2	1/20	000824	—
111	B	—	溝1-111-C9断面図	1/2	1/20	000825	—
112	B	—	溝1-112-C9断面図	1/2	1/20	000826	—
113	B	—	溝1-113-C9断面図	1/2	1/20	000827	—
114	B	—	溝1-114-C9断面図	1/2	1/20	000828	—
115	B	—	溝1-115-C9断面図	1/2	1/20	000829	—
116	B	—	溝1-116-C9断面図	1/2	1/20	000830	—
117	B	—	溝1-117-C9断面図	1/2	1/20	000831	—
118	B	—	溝1-118-C9断面図	1/2	1/20	000832	—
119	B	—	溝1-119-C9断面図	1/2	1/20	000833	—
120	B	—	溝1-120-C9断面図	1/2	1/20	000834	—
121	B	—	溝1-121-C9断面図	1/2	1/20	000835	—
122	B	—	溝1-122-C9断面図	1/2	1/20	000836	—
123	B	—	溝1-123-C9断面図	1/2	1/20	000837	—
124	B	—	溝1-124-C9断面図	1/2	1/20	000838	—
125	B	—	溝1-125-C9断面図	1/2	1/20	000839	—
126	B	—	溝1-126-C9断面図	1/2	1/20	000840	—
127	B	—	溝1-127-C9断面図	1/2	1/20	000841	—
128	B	—	溝1-128-C9断面図	1/2	1/20	000842	—
129	B	—	溝1-129-C9断面図	1/2	1/20	000843	—
130	B	—	溝1-130-C9断面図	1/2	1/20	000844	—
131	B	—	溝1-131-C9断面図	1/2	1/20	000845	—
132	B	—	溝1-132-C9断面図	1/2	1/20	000846	—
133	B	—	溝1-133-C9断面図	1/2	1/20	000847	—
134	B	—	溝1-134-C9断面図	1/2	1/20	000848	—
135	B	—	溝1-135-C9断面図	1/2	1/20	000849	—
136	B	—	溝1-136-C9断面図	1/2	1/20	000850	—
137	B	—	溝1-137-C9断面図	1/2	1/20	000851	—
138	B	—	溝1-138-C9断面図	1/2	1/20	000852	—
139	B	—	溝1-139-C9断面図	1/2	1/20	000853	—
140	B	—	溝1-140-C9断面図	1/2	1/20	000854	—
141	B	—	溝1-141-C9断面図	1/2	1/20	000855	—
142	B	—	溝1-142-C9断面図	1/2	1/20	000856	—
143	B	—	溝1-143-C9断面図	1/2	1/20	000857	—
144	B	—	溝1-144-C9断面図	1/2	1/20	000858	—
145	B	—	溝1-145-C9断面図	1/2	1/20	000859	—
146	B	—	溝1-146-C9断面図	1/2	1/20	000860	—
147	B	—	溝1-147-C9断面図	1/2	1/20	000861	—
148	B	—	溝1-148-C9断面図	1/2			

No.	漢語名・内容	類別	題名	題別	No.	漢語名・内容	類別	題名	題別	No.	漢語名・内容	類別	題名	題別
56	漢語名・内容				186	漢語1-QP;漢2-QS土層剖面				336				
57	漢語1-QS土層剖面				187					337				
58	漢語2-QS土層剖面				188					338	漢語土層			
59					189					339				
60					190					340				
61					191	南盤江土層剖面		蒙古土		341				
62					192					342	土層剖面	蒙古土		
63	漢語1-QS土層剖面				193					343				
64	漢語2-QS土層剖面				194					344				
65					195					345				
66					196					346				
67					197					347				
68					198					348	漢語土層			
69					199					349				
70					200					350				
71	土庫11-QS土層剖面				201	南盤江土層剖面(41-QP)				351				
72	土庫11-QS土層剖面				202					352	南盤江土層剖面			
73	土庫11-QS土層剖面				203	南盤江土層剖面(42;43-QP)				353				
74	土庫11-QS土層剖面				204					354	小坡溝剖面(45)從屬南盤江土層	蒙古土		
75	土庫11-QS土層剖面				205					355				
76	土庫11-QS土層剖面				206					356				
77	土庫11-QS土層剖面				207					357				
78	土庫11-QS土層剖面				208					358				
79	土庫11-QS土層剖面				209					359				
80	土庫11-QS土層剖面				210					360				
81	漢語1-QS土層剖面				211	漢語2-QS土層剖面		蒙古土		361				
82	漢語2-QS土層剖面				212					362	土層剖面	蒙古土		
83	漢語3-QS土層剖面				213					363				
84	漢語4-QS土層剖面				214					364	A區南盤江土層			
85	漢語5-QS土層剖面				215					365				
86	漢語6-QS土層剖面				216					366				
87	漢語7-QS土層剖面				217					367				
88	漢語8-QS土層剖面				218					368				
89	漢語9-QS土層剖面				219					369				
90	漢語10-QS土層剖面				220					370				
91	漢語11-QS土層剖面				221					371				
92	漢語12-QS土層剖面				222					372				
93	漢語13-QS土層剖面				223					373				
94	漢語14-QS土層剖面				224					374				
95	漢語15-QS土層剖面				225					375				
96	漢語16-QS土層剖面				226					376				
97	漢語17-QS土層剖面				227					377				
98	漢語18-QS土層剖面				228					378				
99	漢語19-QS土層剖面				229					379				
100	漢語20-QS土層剖面				230					380				
101	漢語21-QS土層剖面				231					381				
102	漢語22-QS土層剖面				232					382				
103	漢語23-QS土層剖面				233					383				
104	漢語24-QS土層剖面				234					384				
105	漢語25-QS土層剖面				235					385				
106	漢語26-QS土層剖面				236					386				
107	漢語27-QS土層剖面				237					387				
108	漢語28-QS土層剖面				238					388	A區土層剖面(46)土層		SS0010	
109	漢語29-QS土層剖面				239					389				
110	漢語30-QS土層剖面				240					390				
111	漢語31-QS土層剖面				241					391				
112	漢語32-QS土層剖面				242					392				
113	漢語33-QS土層剖面				243					393				
114	漢語34-QS土層剖面				244					394				
115	漢語35-QS土層剖面				245					395				
116	漢語36-QS土層剖面				246					396				
117	漢語37-QS土層剖面				247					397				
118	漢語38-QS土層剖面				248					398				
119	漢語39-QS土層剖面				249					399				
120	漢語40-QS土層剖面				250					400				
121	漢語41-QS土層剖面				251					401				
122	漢語42-QS土層剖面				252					402				
123	漢語43-QS土層剖面				253					403				
124	漢語44-QS土層剖面				254					404				
125	漢語45-QS土層剖面				255					405				
126	漢語46-QS土層剖面				256					406				
127	漢語47-QS土層剖面				257					407				
128	漢語48-QS土層剖面				258					408				
129	漢語49-QS土層剖面				259					409				
130	漢語50-QS土層剖面				260					410				
131	漢語51-QS土層剖面				261					411				
132	漢語52-QS土層剖面				262					412				
133	漢語53-QS土層剖面				263					413				
134	漢語54-QS土層剖面				264					414				
135	漢語55-QS土層剖面				265					415				
136	漢語56-QS土層剖面				266					416				
137	漢語57-QS土層剖面				267					417				
138	漢語58-QS土層剖面				268					418				
139	漢語59-QS土層剖面				269					419				
140	漢語60-QS土層剖面				270					420				
141	漢語61-QS土層剖面				271					421				
142	漢語62-QS土層剖面				272					422				
143	漢語63-QS土層剖面				273					423				
144	漢語64-QS土層剖面				274					424				
145	漢語65-QS土層剖面				275					425				
146	漢語66-QS土層剖面				276					426				
147	漢語67-QS土層剖面				277					427				
148	漢語68-QS土層剖面				278					428				
149	漢語69-QS土層剖面				279					429				
150	漢語70-QS土層剖面				280					430				
151	漢語71-QS土層剖面				281					431				
152	漢語72-QS土層剖面				282					432				
153	漢語73-QS土層剖面				283					433				
154	漢語74-QS土層剖面				284					434				
155	漢語75-QS土層剖面				285					435				
156	漢語76-QS土層剖面				286					436				
157	漢語77-QS土層剖面				287					437				
158	漢語78-QS土層剖面				288					438				
159	漢語79-QS土層剖面				289					439				
160	漢語80-QS土層剖面				290					440				
161	漢語81-QS土層剖面				291					441				
162	漢語82-QS土層剖面				292					442				
163	漢語83-QS土層剖面				293					443				
164	漢語84-QS土層剖面				294					444				
165	漢語85-QS土層剖面				295					445				
166	漢語86-QS土層剖面				296					446				
167	漢語87-QS土層剖面				297					447				
168	漢語88-QS土層剖面				298					448				
169	漢語89-QS土層剖面				299					449				
170	漢語90-QS土層剖面				300					450				
171	漢語91-QS土層剖面				301					451				
172	漢語92-QS土層剖面				302					452				
173	漢語93-QS土層剖面				303					453				
174	漢語94-QS土層剖面				304					454				
175	漢語95-QS土層剖面				305					455				
176	漢語96-QS土層剖面				306					456				
177	漢語97-QS土層剖面				307					457				
178	漢語98-QS土層剖面				308					458				
179	漢語99-QS土層剖面				309					459				
180	漢語100-QS土層剖面				310					460				
181	漢語101-QS土層剖面				311					461				
182	漢語102-QS土層剖面				312					462				
183	漢語103-QS土層剖面				313					463				
184	漢語104-QS土層剖面				314					464				
185	漢語105-QS土層剖面				315					465				
186	漢語106-QS土層剖面				316					466				
187	漢語107-QS土層剖面				317					467				
188	漢語108-QS土層剖面				318					468				
189	漢語109-QS土層剖面				319					469				
190	漢語110-QS土層剖面				320					470				
191	漢語111-QS土層剖面				321					471				
192	漢語112-QS土層剖面				322					472				
193	漢語113-QS土層剖面				323					473				
194	漢語114-QS土層剖面				324					474				
195	漢語115-QS土層剖面				325					475				
196	漢語116-QS土層剖面				3									

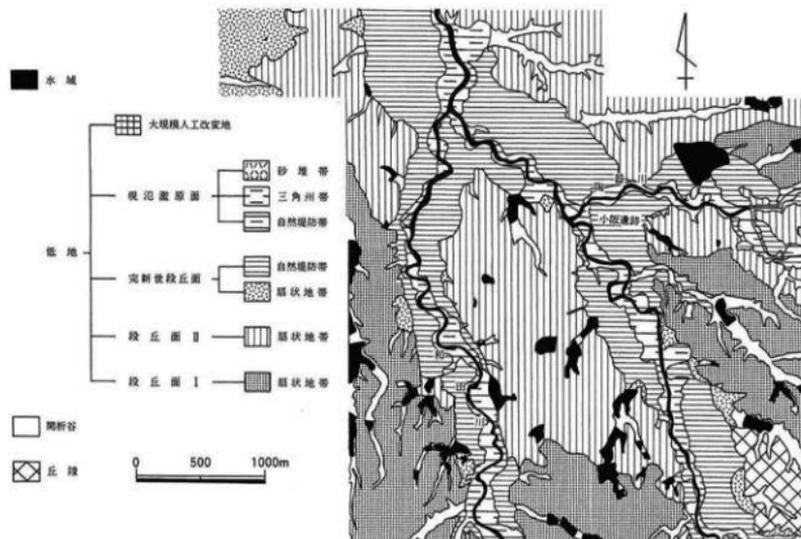
図面・図版

凡 例

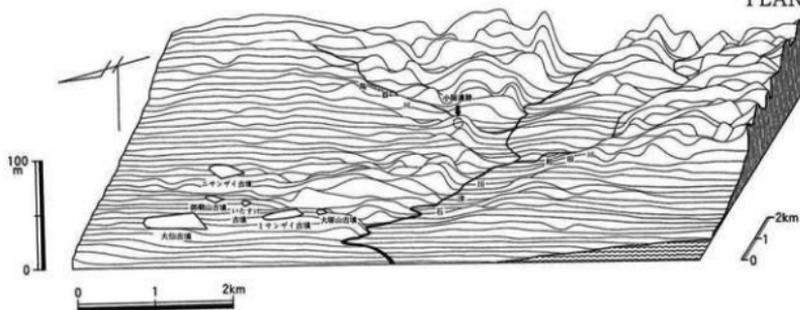
1. 遺構の寸法数字はm単位である。
2. 実測図の基準線は国土調査法の第VI座標系によるものである。ただし、
図面ではX・Yおよび単位mを省略している。
3. 遺構には一連番号を付し、Tab. 5の分類記号を表記する。
4. 須恵器の型式名は、田辺昭三1981『須恵器大成』(田辺新案)による。
5. 中世土器のうち瓦器の型式名は、中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』
(尾上実新案)による。

道路	OA	Avenue	土器溜・瓦溜	OT	Trash
建物	OB	Building	井戸	OW	Well
竪穴住居	OD	Dwelling	苑池	OY	Yard
土塁・石塁	OE	Earth work	水田・畑	OZ	
柵・塀	OF	Fence	祭祀	OC	Ceremony
炉	OH	Hearth	窯	OK	Kiln
水利施設	OI	Irrigation	池・沼	OL	Lake
土坑	OO	Orifice	貝塚	OM	Midden
ピット	OP	Pit	墓地	OG	Grave
河川	OR	River	埋葬施設	OU	Urn
溝	OS	Stream	その他・不明	OX	Extra

Tab. 5 遺構の種類と記号



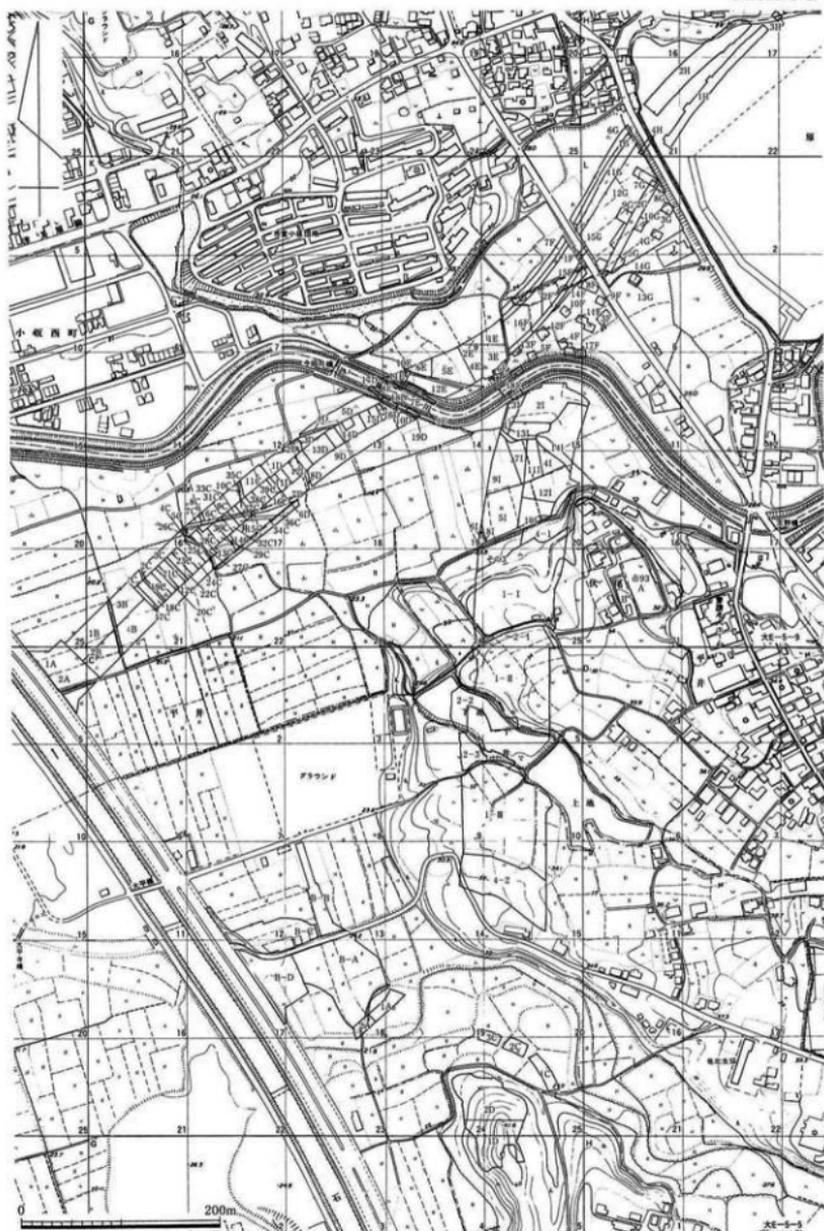
小阪道跡周辺地形分類及び小字名
 [文献1-③④図を改変]



- | | | | | | | |
|------------|-----------|------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 1. 日原古墳群 | 11. 大坂古墳群 | 21. 藤田神社跡 | 31. 土師段丘南寺 | 41. 長尾古墳 | 51. 土師段丘北 | 61. 堀城古墳 |
| 2. 日原古墳群北 | 12. 小代古墳群 | 22. 平井遺跡 | 32. 土師段丘 | 42. 長尾古墳 | 52. ミヤノイ古墳 | 62. 堀城古墳 |
| 3. 藤田遺跡 | 13. 伏見遺跡 | 23. 土師 | 33. ミヤノイ古墳 | 43. 堀城古墳 | 53. 大坂山古墳 | 63. 堀城遺跡 |
| 4. 陶器千塚 | 14. 藤田遺跡東 | 24. 八田神社遺跡 | 34. 藤田山古墳 | 44. 長尾神社遺 | 54. 大坂山古墳 | 64. 宮本平塚古墳 |
| 5. 御前山古墳 | 15. 万石遺跡 | 25. 万石遺跡 | 35. 百舌鳥神社遺跡 | 45. 茶山古墳 | 55. 乳ノ洞古墳 | 65. 大坂山遺跡 |
| 6. 藤田ノ塚の古墳 | 16. 聖金平遺跡 | 26. 万石遺跡 | 36. 百舌鳥神社遺跡 | 46. 大坂山古墳 | 56. 石塚遺跡 | 66. 大坂山遺跡 |
| 7. 下瓦7号古墳 | 17. 栗木遺跡 | 27. 跡の宮遺跡 | 37. 石巻神社遺跡 | 47. 丸尾山古墳 | 57. 四ノ池遺跡 | 67. 上河遺跡 |
| 8. 小坂城跡 | 18. 万石色遺跡 | 28. 藤田神社遺跡 | 38. 藤田山古墳 | 48. 藤田遺跡 | 58. 跡寺深田森遺跡 | 68. 日守山古墳 |
| 9. 平石古墳群 | 19. 大平寺遺跡 | 29. 七光遺跡 | 39. 赤トン山古墳 | 49. 大坂山遺跡 | 59. 跡寺貫山古墳 | 69. 黄金塚古墳 |
| 10. 野々井遺跡 | 20. 小嶋遺跡 | 30. 聖忍寺 | 40. イノナリ古墳 | 50. 大坂山明遺跡 | 60. 赤中明神古墳 | 70. 菅原山古墳 |

小坂周辺遺跡と鳥瞰図(茅渟海から「陶邑」を望む)

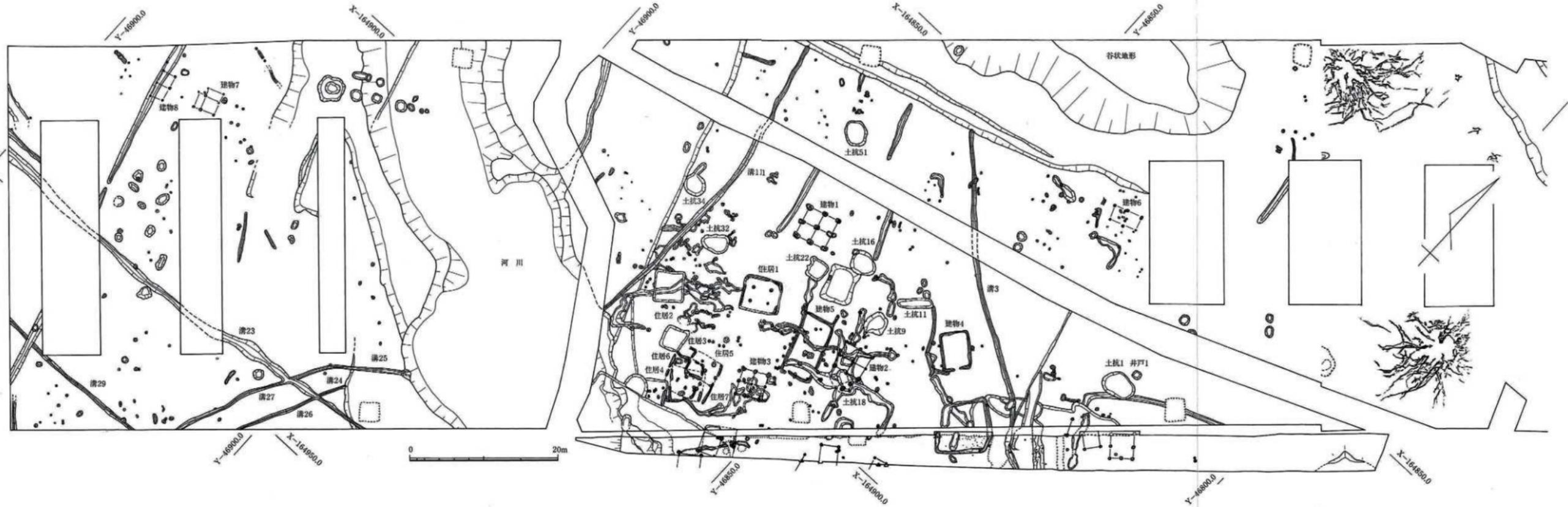
[文献1-⑦図を改変]

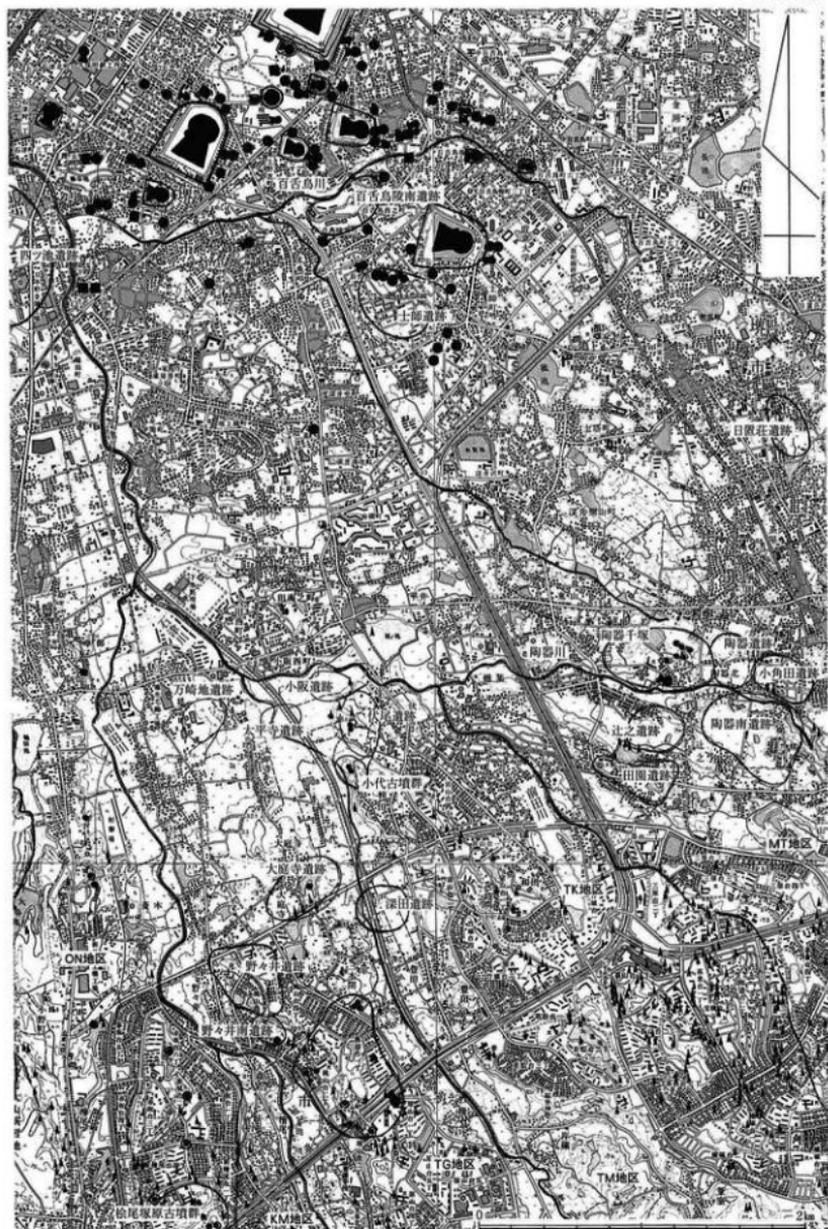


小坂周辺全調査地位位置図 (1 : 5000)



古墳時代集落遺構全体図





陶邑古窯址群・古墳・遺跡分布図



調査地周辺空中写真

(2000年7月18日撮影)



道跡全景

(北上空から)



調査地全景

(南西上空から)



第I面全景

(東から)



掘立柱建物

OB-1・2 (南から)



平地式住居

9-OS・10-00 (南から)



掘立柱建物

OB-4~6 (西から)



平地式住居・溝・土坑・落ち込み

6・8-OS・7-OX (南東から)



遺物出土状態

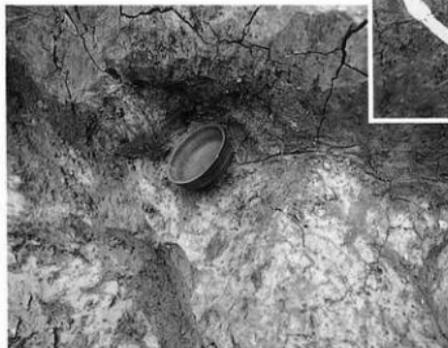
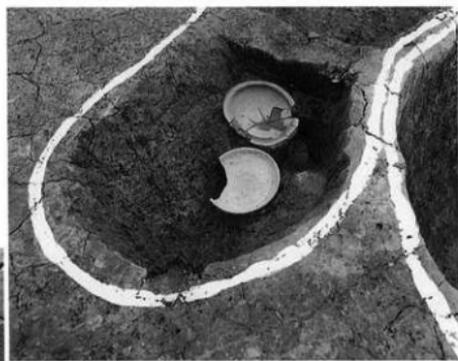


6-OS・7-OX



堅穴住居・土坑・溝

16-OD・15-00・2-OS (東から)



遺物出土状態

2-OS・15-00



竪穴住居

16-OD (東から)



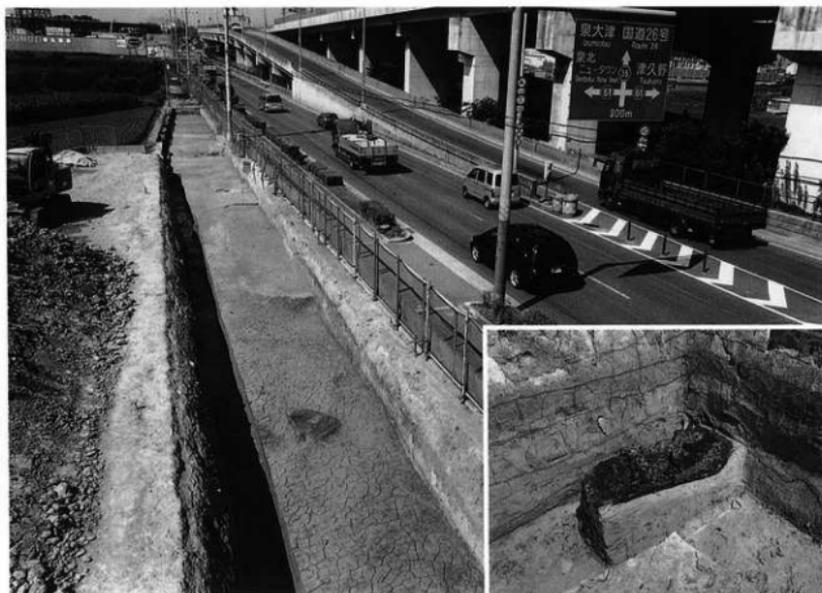
南壁土層

2-OS・1-OR (北から)



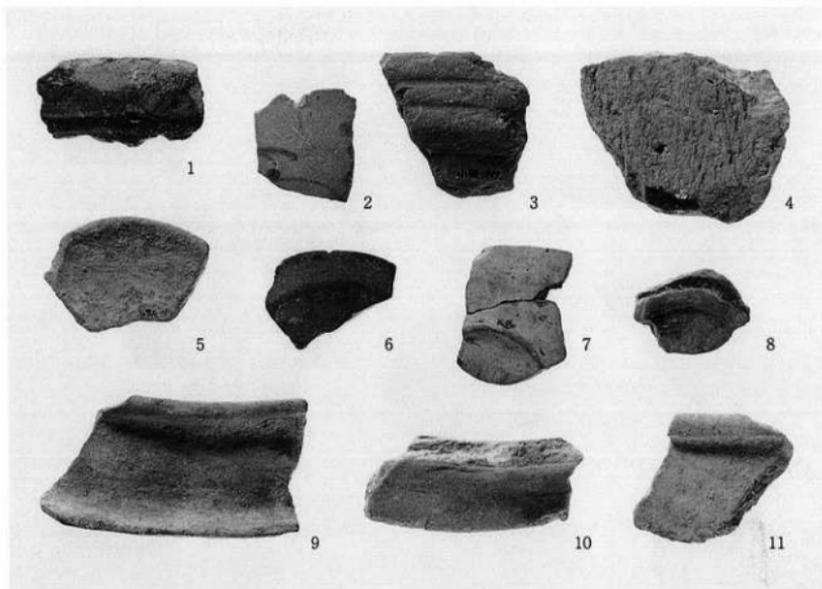
第Ⅱ面全景

自然流路（西から）

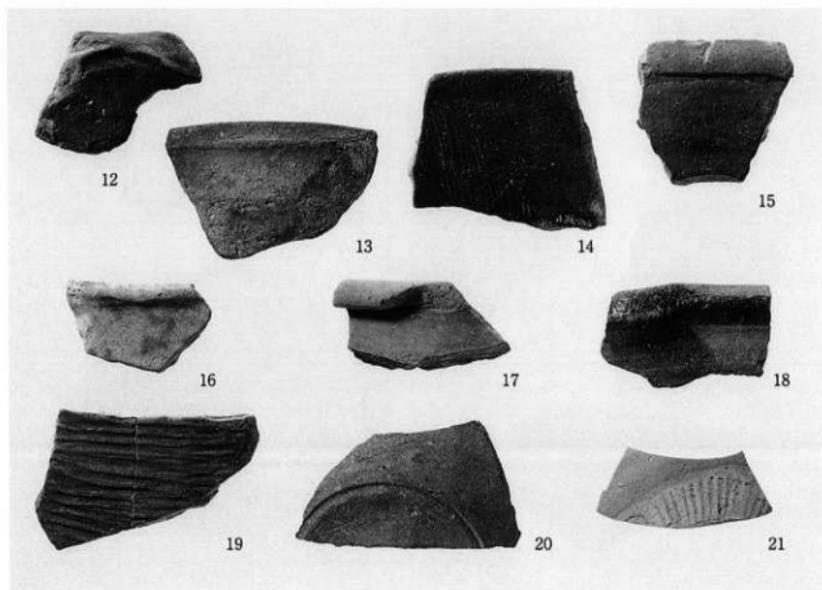


第Ⅱ面全景・5層出土木材

自然流路（東から）

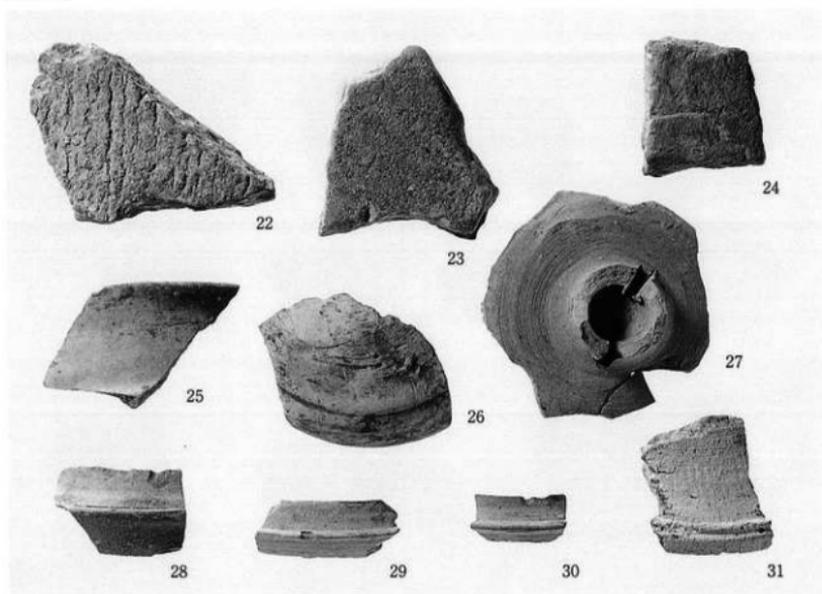


1層(1~4)・2層(5~11) 近世中世土器

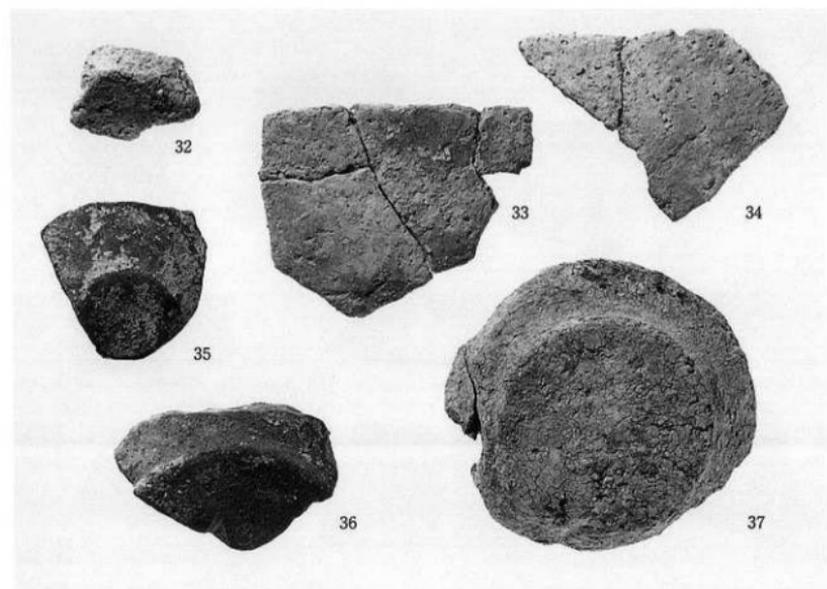


包含層出土遺物(1)

2層(12~21) 中世土器



2層 (22~31) 古代土器



包含層出土遺物(2)

2層 (35)・3・4層 (32~34・36~37) 弥生土器



38



39



40



42



41



43



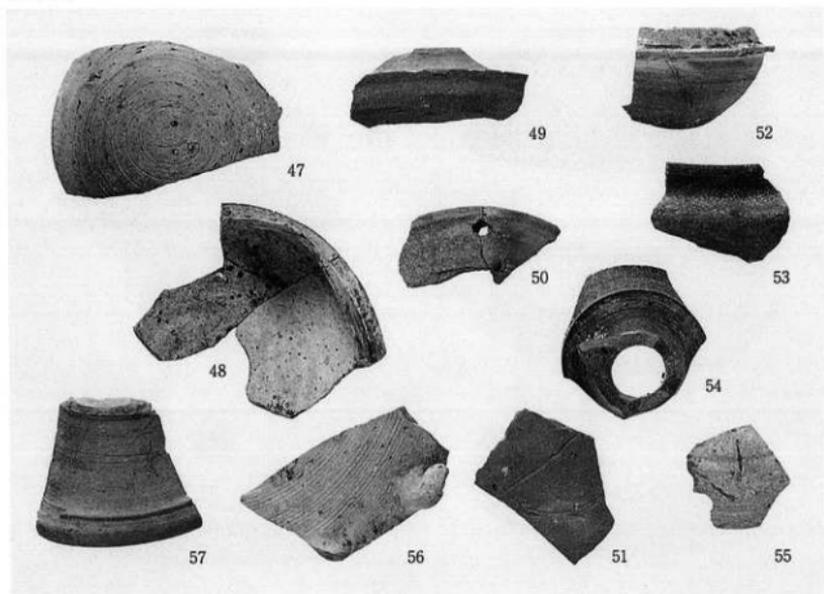
44



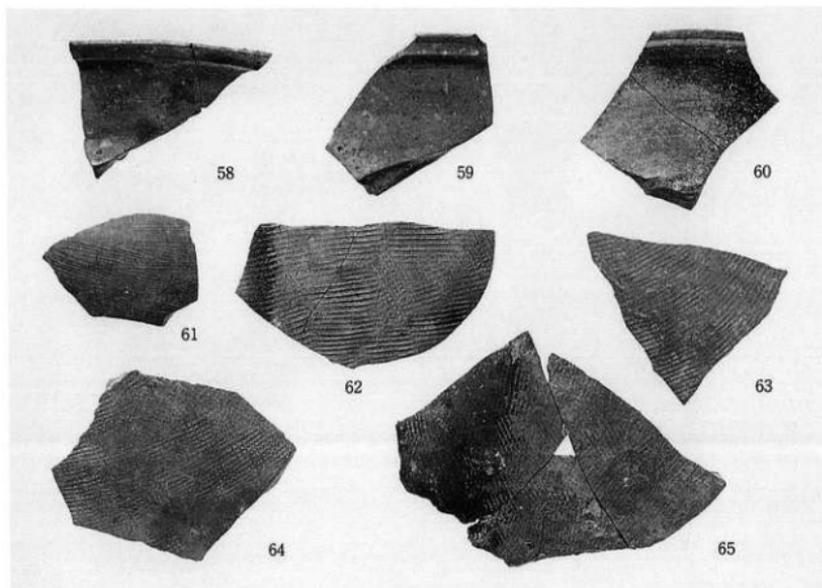
45



46

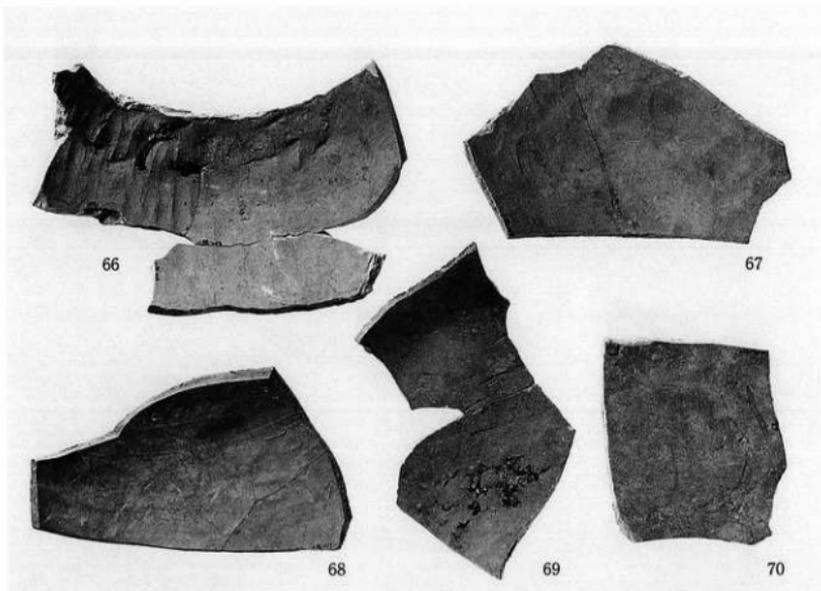


2-O S (47~57)

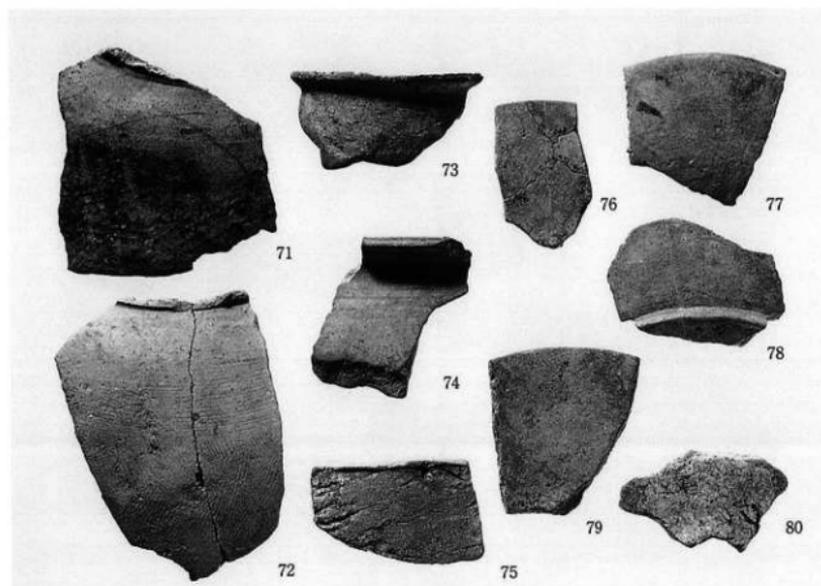


遺構出土遺物(2)

2-O S (58~65)

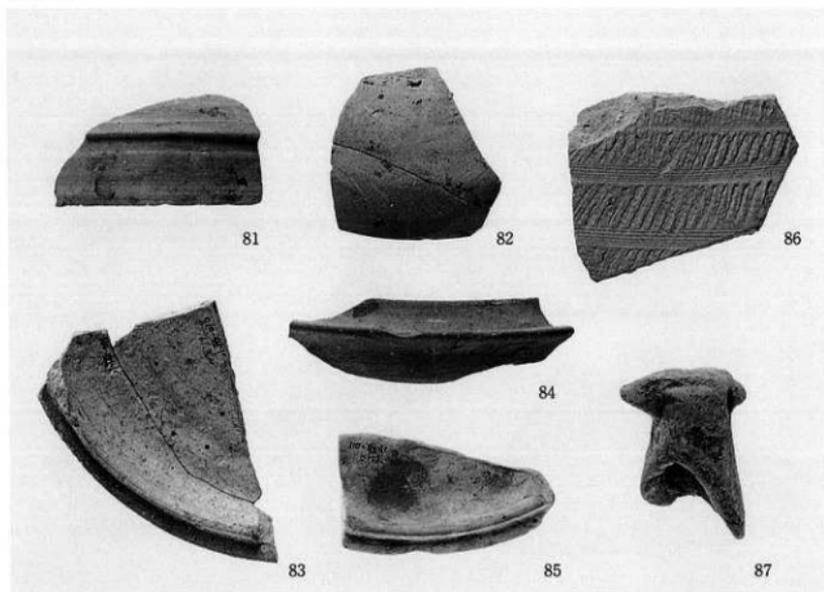


2-O S 堯内面の調整 (66~70)

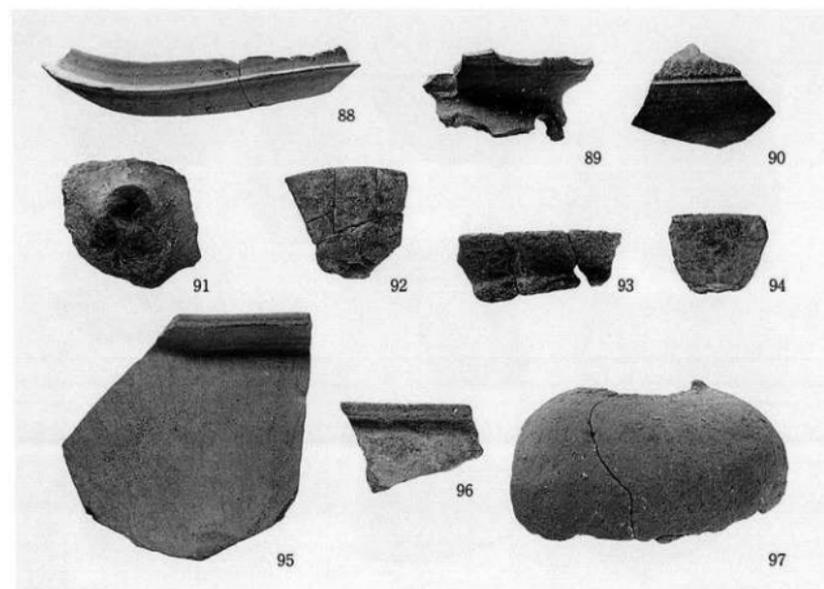


遺構出土遺物(3)

2-O S (71~80)



1-O R (81~87)



遺構出土遺物(4)

15-O O (88・89)・6-O S (90・92~97)・7-O X (91)

報 告 書 抄 録

ふりがな	こさかいせき							
書名	小阪遺跡Ⅱ							
副書名	近畿自動車道松原那智勝浦線(松原～泉南)平井TB建設事業に伴う発掘調査報告書							
巻次	小阪遺跡調査報告16							
シリーズ名	財大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	田中一廣							
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
小 阪 遺 跡	大阪府堺市 小阪・八田北町 地内他	27201	堺市181	34° 30′ 45″ 34° 30′ 43″	135° 29′ 25″ 135° 29′ 22″	20000615) 20000831	約435m ²	近畿自動車道松原那智勝浦線(松原～泉南)平井TB・堺泉北線改良事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
小 阪	集落跡	古 墳 中 期	竪穴住居	1 棟	初期須恵器・ 韓式系土器・ 埴輪・土師器 瓦質土器・土師質土器		・集落の広がり・集落を 画する溝・流路を追認	
			平地式住居	1 棟				
			掘立柱建物	8 棟				
			流路	1 条				
			溝	4 条				
			土坑	6 基				
	生産跡	中世後期～近代	水田址				・耕作地化されるのは中 世後期以降	

①大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第62集

小 阪 遺 跡 Ⅱ

近畿自動車道松原那智勝浦線(松原～泉南)平井TB建設事業に伴う
発掘調査報告書

2001年3月31日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター
〒590-0105 堺市竹城台3丁21-4
TEL 0722-99-8791

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

表紙題字は白橋鐘道師による